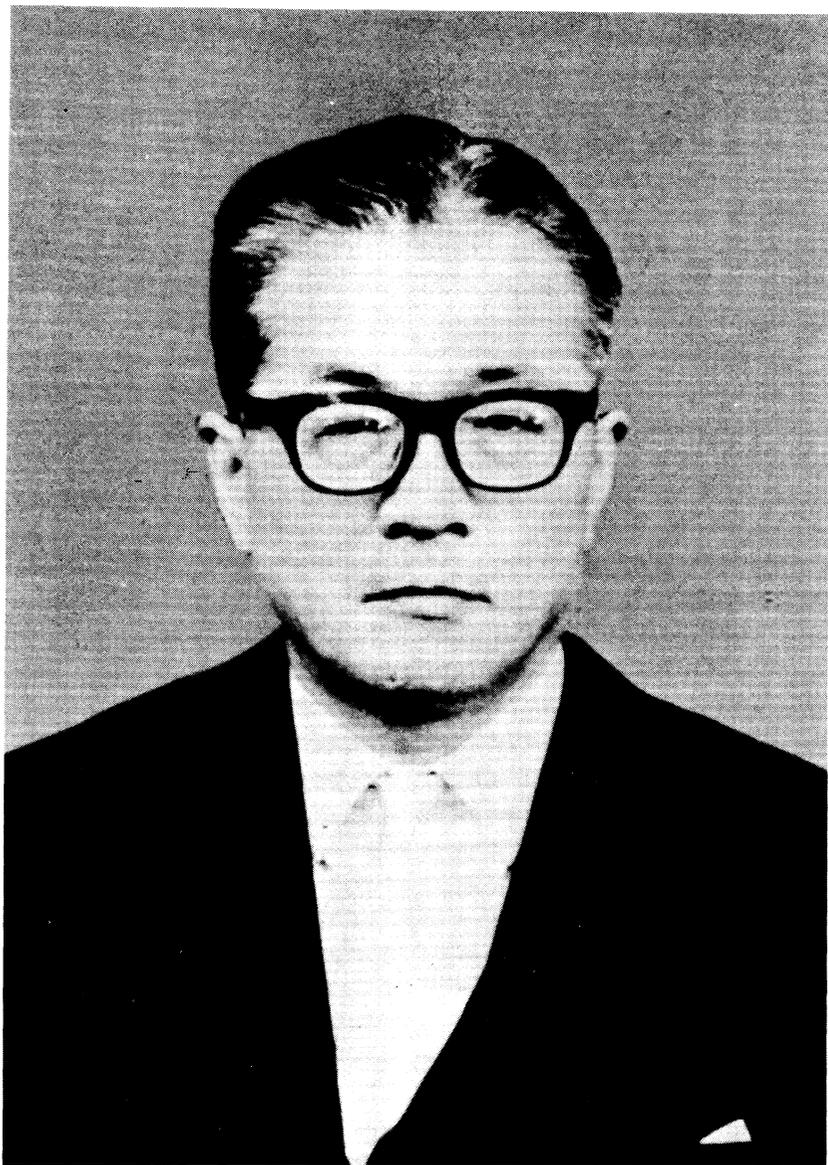


ふるさと

池田亀夫教授退職記念号



慶応義塾大学整形外科同窓会誌



池田 亀夫 教授

《池田亀夫教授略歴》

- 大正 7 年 8 月 28 日 群馬県に生まる
- 昭和 17 年 9 月 30 日 慶応義塾大学医学部卒業
- 昭和 17 年 9 月 26 日 整形外科学教室助手
- 昭和 25 年 10 月 1 日 慶応義塾大学講師
- 昭和 27 年 6 月 学位記取得
- 昭和 28 年 5 月 18 日 慶応義塾大学助教授
- 昭和 37 年 11 月 29 日~ } 香港大学出張
- 昭和 38 年 3 月 1 日 }
- 昭和 41 年 12 月 1 日 慶応義塾大学教授
- 昭和 52 年 5 月 5 日 第 20 回日本手の外科学会会長
- 昭和 52 年 9 月 9 日 第 26 回東日本臨床整形外科学会会長
- 昭和 59 年 3 月 31 日 定年退職

目次

日本整形外科学会会長として	泉田重雄	3
池田教授を想う	大内正夫	2
特集 池田亀夫教授退職にあたり		
「心の目」	小柴清定	4
池田先生とのゴルフ	鷺谷澄夫	5
池田先生と「Lepa」私	矢部裕	6
現役時代の池田教授	花岡英弥	9
若き日の池田教授	池田田英彬	10
池田先生の想い出	内西兼一郎	21
池田教授の現役時代	有馬亨	14
池田教授の下で	津布久雅	18
池田教授の御退官に際して	新名正由	21
箱根での池田教授	石黒正隆	23
ヨーロッパへの旅	白田正雄	27
故 栃原先生の偉業を偲ぶ	藤原由利夫	34
「少年ケニヤ隊」同行記	鶴田征夫	37
慶大整形レジデント制について	若野紘一	48
新人紹介		50
教室だより		67

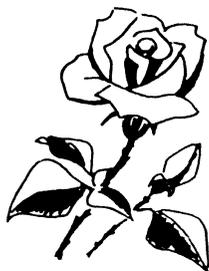
日本整形外科学会会長として

泉 田 重 雄

昭和60年4月の日本整形外科学会評議員会、次いで日本整形外科学会通常総会において、今期、即ち第59回日本整形外科学会会長として、不肖私が承認をうけて、学術集會期日の終了と共に学会長に就任致しました。この

私共もとよりこの目的のために全力を尽す所存でございますので一層の御支援を御願ひ申し上げる次第でございます。

栄誉を得られましたことは私にとって生涯にまたたない光栄であり喜びであります。ことごとくに至りませぬには教室・同窓の皆様の大御後援をいただいたお蔭であります。こゝに更めて、御礼申し上げますと共に責任の重大さを身と身に覚える次第であります。学会の目的は従来、学問進歩のための学術集會が主なものでありましたが、狂瀾怒濤の中にある今日の医療・医政・医学会においては好むと好まざるに不拘、学問以外の多くの難問の対応を迫られることとなります。幸に教室は年々順調に発展し、現在同窓会員のCordunumberも六百に近く、研究・教育・診療共著しい充実を見ております。教室の若い力を結集し、これに諸先輩の御鞭撻・御支援が得られますならば、慶應らしい、立派な学会の運営、学術集會開催が必ず達成し得るものと信じております。



池田教授を想う

大内正夫 12

一口で言えば悲運の人であった。

終戦間もない頃、慶応病院も本館は空襲で焼け落ち、残った別館の一階で細々と外来をやっている時だった。大柄で少しヌーとした男がやって来た。これが帰還間もない彼だった。質問は他の者と異なり、勉強不足の自分を刺すようなところがあり、初対面のくせに生意気な後輩だとさえ思った程だった。これが彼との初対面だった。岩原先生の当時の言葉を借りると「彼の研究態度は、一つのことを勉強するとき、その傍系のことまで徹底的に調べて、彼の研究態度は他の者達と違って、幅広い」このことだった。

昭和二十五年講師、二十八年助教授、岩原先生の親任益々厚く、昭和四十一年教室の跡目となって母校の教授となった。

彼は抱負を実現すべく頑張った。しかし四十四年小発作に見舞われ、これは幸にも痕跡なく回復したが、その頃から学生運動、学園改革、所謂新体制運動が始まり、この下剋上の風潮に人一倍の苦勞をなめた。

昭和五十年代となり、学園騒動もおさまり、教室一本化の気運もたかまり、教室主任教授に選出され、愈々これからの大切な時機に大発作に見舞われ、不幸にも再び立つことなく、遂に退職の時期を迎えることとなった。

人は英才と努力をもってしても、どうにもならない運命がある。今後は療養専一に、再び元気の姿に戻られんことを祈るのみである。



特集——池田亀夫教授退職にあたり

「心の目」

小柴清定 14

「十年一昔」と言うが、吾々十四回生四名と十三回生左奈田先生と五名が入局して今年で四八年になる。故前田和二郎教授を中心に教室員は実動七名の処に迎え入れられた。

日整会宿題「脊椎外科」に丸になって取組んで居り、その意気込みは新入局者にも伝わって来る。新人なりにお手伝出来たのは、光栄であった。

「脊椎外科」で慶大整形外科の面目を発揮した。当時は整形外科学教室は独立していても、医局は外科医局の寄生虫的存在だった。当直は外科の先輩と組む。医局員は相互に一人三ヶ月間、交代するシステムが採られていた。一面から言えば、私の外科に就ての勉強に役立った。

整形外科 事実上の医局は、教授室に隣接する「標本室」であった。今の医局の約半分位の室に、標本関係用具と同居である。

岩原助教授、伊藤、小泉、大内先輩の机に私共三名が加わることになる。標本関係のスペースと私の机は共通で、昼は検査に、夕方からは机に早変わりする。畠中、野崎講師と軍務不在の蓮江先輩、同級の加納、高田君の席は、はみ出して、理学室の片隅に囲った仮室であった。

診療時間が過ぎ、入浴夕食が済む頃、ポツポツ顔が揃う。標本室の一隅助教授席に、湯上りのタオルを頭に乘せ、好物の熱い番茶をすゝっている岩原助教授の姿は、今でも時々想い出す。一同の「兄貴」的存在だった。

「メニクス」損傷例報告をすることになっていた私は、これから症例整理、文献調査、解剖生理面の検討、力士の勝負手と膝関節運動の相関等に取掛る。知らぬ間に時間が経ち九時過ぎるのが常であった。時には十一時近くになり、主任看護婦、看護学生の鍵番ペアーに

「未だお仕事ですか？ 火の用心をお願いしますよ」と声を掛けられ、終電を逃さぬよう急ぎ帰り仕度する。ことも度々であった。

前田教授がヒョッコリ顔を出され、独特の関西弁アクセントで仕事の捗取り具合を聞かれる。新入局員にも先

生の目がそゝがれている。当時の教室風景の一コマを述べた。

今の教員室には想像もつかないことと思う。大教室に発展した現在では、教員室の心を集中させることは小人数の昔と異り仲々困難なことであろう。故前田教授を引継いだ岩原、池田、泉田教授の御努力で、大発展した現教室は、多くの研究班や、三〇余の関連病院への出張等で、全教員員の一堂に会することも至難である。

然し泉田教授を中心に、来るべき日整会での活躍を目指して、全員の「心の目」が集結し、成果を挙げるのを期している。

池田亀夫先生とのゴルフ

鷺谷澄夫 80

「わい、これが楽しくてゴルフをやるようなもんだ。」
先生は生ビールをぐいと一口飲み込んだ。

ところは宇都宮市郊外の白鷺カントリークラブであった。相手をするのは小生の子供二人と小生である。先生

の第二次発作前年の初冬であった。

先生の酒量はすっかり健康時に戻っている。

恐る恐る相手をしていたゴルフも頗る好スコアで前半は四六ととても油断出来るどころではなかった。従ってビールも美味しい筈だ。

「先生疲れませんか」

「いや、わしは大丈夫。それより若い人に元気がないなア」

「スコアが冴えないせいですよ」

子供二人は五十を切れないことにくさっていた。

晩秋の一日。私どもは後半も先生のスコアに追いつけないままであった。

「アイアンの距離はどうしても一本違うな」等と言って何故かアイアンだけ好調な私をなぐさめた。

「もうハーフ位はいけるな」

楽しい証拠とうけとめながら暮れかかったゴルフ場をあとにした。

拙宅に帰りサンライズのネクタイをプレゼントして賞品にかえると

「これは結構な品を、どうも」と幾分どもりながら仰言って眼鏡を直した。

ビールに目がないという感じでかわいたのどをうるお

した先生は「時間はまだかね」を繰返していた。

とりとめもない話に何とか時間をつぶしてもらいな
がらやがて時間が来た。

「やっと時間になりました。また計画しますのでき
ときて下さい」

「そいつは楽しみだ」

好スコアは体調の良さと受止めて私も心から頼もしく
思った。

その後同窓会の席上やら会のあとやらで話し合うこと
はあったがゴルフは遂にやることもないままになった。

病室に見舞った折

「おせ……」

と、絶句されていたことに

「いや、ご無理なされないで」

等と解かってやるうともしないで引上げて来たことがく
やまれる。

先頃贈った歳暮のお礼を云われようとしてのことだっ
たと、先生の几帳面な一面を知らされるおもいであつた。

池田先生の学会における業績は一時期トップを飾るも
のであつた。しかし先生の人間性は決してそれを裏付け
るような強靱なものでなかつたことを後年知って、残念
でならない。

もっとその時々岩原門下の弟として何かしてやらなけ
ればならなかつたと後悔しているのである。

池田教授と Lepira と私

藤田学園保健衛生大学
医学部整形外科 教授 矢部 裕 66

池田教授が助教授時代、手の外科、特に癩性麻痺手を
手がけ、教室手の外科班は、やがて木住野講師、矢部、
内西講師、山根君へと引き継がれて行った歴史を今の若
い教室員はあまり知るまい。

昭和三二年に第一回日本手の外科学会が開催され、私
が入局した翌年の昭和三四年に第三回日本手の外科学会
が岩原会長により主催された。このことは当時の池田助
教授の業績による。

現在の津下、田島教授はもとより、赤星、高岸、鳥山
教授等は当時助教、講師であり、池田助教を含め、
いずれも日本の手の外科の先駆者であつたことをあえて
記しておく必要がある。

昭和三三年四月、私が入局した頃の教室は、脊椎脊髓が教室の主流であり、手の外科の患者は少なかつた。

free skin graft が許されず、手の癩痕拘縮に対し、abdominal flap を行い、緑膿菌が感染して更に数回の手術の結果、カチカチになった症例が妙に記憶に残っている。主治医は入局三年生であつた野口講師であり、術者も多分彼であつたと記憶する。池田助教授が駆血をせずに大きな手で屈筋腱の移植を行つても、その結果は残念ながら良好とは言えなかつた。しかし麻痺手における母指対立腱移行の結果はすばらしかつた。

入局三、四年生の頃、池田助教授から良く駿河療養所へのお供を命じられた。癩療養所なのであまり行きたくなかつたが「矢部君、明日行こうや」と突然いわれると断わり切れず、御殿場線の煙をはく汽車にのつた。

拘縮の比較的小ない麻痺手を選び、主に Jordan 法による母指対立再建術の助手を一、二例やらされた。局麻で、駆血はせず、絹糸で腱縫合を行つた。術後の化学療法はサルファ剤またはペニシリンであつた。

帰りに御殿場線に乗ると何となく人心地がつく。「矢部君、矢部君」大きな手に千円札がある。カンビール数本とつまみ少々を買つて来て、汽車が動くと同時に一氣に飲みほした。何となくせわしい人であつた。

こんなことで手の外科に興味をもち、大学院が終了した頃、岩原教授から、手の外科をやるなら二つ条件がある。一つは癩療養所へ行くこと、もう一つは外国へ行くこと。をいいわたされた。その年（昭和三七年）の秋、岡山で児玉教授が第六回日本手の外科学会を主催した。岩原教授、池田助教授を始めとし、慶応勢大挙して岡山駅へつき、開札口を出たとたん、長島愛生園の高島園長に辣致され、後楽園の隣、鳥城下の料亭につれて行かれた。もう覚悟は出来ていた。どうせ行くのなら、うんと飲んだ方が得だ。浴びる程飲んで、一年余りの島流しは決定した。

昭和三八年一月、新婚で、つわり気味のワイフを伴つて岡山へ赴いた。夜行三等寝台車、浜松で冷えたうなぎめしが入つたのみで、あとは水も入らない。今のワイフでは想像もつかない位、痩せ細つた。点滴で脱水だけは防いだが、止むをえず、一週間足らずで実家へ帰した。あとは岡チヨンの生活が続く。

国立という所は全くどうしようもない。麻痺患者のカードを作り、リハビリテーションプログラムを立てても、お風呂とオリーブ油以外何もない。パラフィン浴槽と部分浴槽、更に各種の機能訓練用機器を購入してくれる様申請したが、次年度の予算計上は終つたので次々年度

の予算でなければ買えないという。一年の契約で来て、一年三カ月後でなければ買えないなんて。それじゃ何も出来やしない。園長に直接交渉して二〇〇三〇万の特別予算をとって来てもらった。パラフィン浴槽を買うとあとは一〇万余りしか残らない。中古の風呂桶に使えない電気掃除機をつけて、パイプラバスを作った。木材と鉛化ビニールパイプ各種とゴムヒモ等を買って、各種機能訓練用機器を作った。

しばらくは機能訓練を行い、拘縮がとれた手となっても卒後五年の若僧では誰も機能再建手術を希望しない。同期に信大から赴任した橋爪先生と週一回岡山大学へ通い、津下助教教授の手の手術を見学するのが唯一のなぐさめとなった。

昭和三八年五月、池田助教教授の九州への学会帰りをとらえ、愛生園へ一晩泊りで招聘した。私は今迄の経過を報告し、打解策を相談した。「ほうかい。矢部君、心配することは何もないよ」という。小島の春の夕靄の中で、二人して酒をのみ、やることもないので碁をうった。小生二勝〇敗。

翌日、手術希望の患者数名を診察し、その中から一名 opponoplasty, 一名 Watkins の op. をやってもらった。その結果は上々だった。特に Watkins の op. を行った

患者が、病院中、上る様になった (dorsiflexion が出る様になった) 足をみせびらかし、ふれ廻ってくれた。今度は手の手術を私にしてくれという。幸にその結果も上々だったので、以後手術患者が殺到する様になった。まさに「ほうかい。心配することはないよ」の通りとなった。このため、信大の橋爪先生はしばらく足の手術に専念せねばならなかった。

一年で慶応へ帰るつもりであったが、予約した患者さんの手術をやり終えなかったことと次の代替の人が来るかも知れない期待もあって滞在を三カ月延長した。一年交代で三名三年間整形外科医を愛生園へ送るといった岩原慶応病院長の約束はあとが続かず、ホゴになった。しかし小生にとっては、ぎっしり記録した四冊の大学ノートと数百枚のスライド写真が貴重な財産となった。私自身、手の外科にのめり込み、特に麻痺手を得意とする様になったのは、池田教授の頼への誘いと心配ないといった励しの言葉による。

手の外科以外、脊椎外科、先天異常、骨折、骨腫瘍、生化学等、池田教授の業績は多岐にわたる。戦車の様に頑健であったが故に無理を重ね、残念なことに志中途にして病に倒れた。かつ大学紛争の火花もかぶった。

今はただ病が癒える奇跡を祈るばかりである。

現役時代の池田教授

花岡英弥 37

池田教授御退職記念号に何か書くようにとの編集子の依頼なので、思いつくまゝ池田教授御在職時代のことを書いてその責を果したいと思う。

私が初めて池田教授にお目に掛ったのは、学三の授業の時であると思う。当時、先生はまだ助教授でお若く、ふとっておられ、黒板に大きな丸味のある字で「FOLKLORE……」と次々と書きながら、元気な大きな声で骨折の講義をされた。

その後、先生と親しく接する機会を得るようになったのは、入局後のことで、特に私が足利日赤から教室へ戻ってきた昭和三八年以降のことである。

若い頃に柔道をされておられた池田助教授は、ローマ・オリンピックにも選手団医師として行かれたことがあり、丁度、東京オリンピックを控えて、オリンピック準備委員として救護の対策の計画に当られていた。赤坂の国会図書館（現在の迎賓館）にオリンピック委員会があり、救護に関する小委員会がしばしば開かれた。先生が多忙のため、私も先生の代理として出席することが多か

った。

また、先生はレプラの麻痺手の手術を得意とされており、御殿場にあるカトリックのレプラの療養所へ時々手術に行かれておられた。手術の助手として私も何度もお伴したが、行きの電車の中では、先生は研究のことや九死に一生を得た軍隊時代のことなど色々話され、先生と親しく接することができた。帰りはカンピール一本飲まれた後、殆ど眠っておられた。

教授に昇進された頃、私は神奈川済生会へ出張し、さらに米国へ留学したので、先生に再びお目に掛った時には、先生は大学改革の嵐の中で教育主任として学生の教育を主に担当されていた。また、その間に第一回の脳出血発作で倒れられ、リハビリの後、回復されておられたが、減量されて、すっかりスマートになっておられた。

私は昭和四八年、教室へ戻った後、泉田教授より教育委員を命ぜられたため、再び何かと池田教授と接するところが増えた。また、四人いた教育委員の中から、福田・伊勢亀両委員が相次いで、東海大への転出や病棟医長への転出などで委員を辞したため、内西君と私の二人だけになってしまった時代が暫く続き、学生の講義のことで益々先生と接することが増えた。そのうち、学内の制度が変り、それに応じて教室でも選挙が行われ、池田教授

が教室主任となられ、私が医局長に命ぜられた。

先生は教室主任になられて随分張り切っておられたが、多忙に過ぎたのであろうか、僅か二ヶ月後に再び脳出血で倒れられ、以後再起されることなくそのまゝ御退職され、現在も御療養中なのは、大変お気の毒なことである。たゞ、泉田教授並びに平林助教授の御努力により、経済面をあまり心配されずに御療養に専念できるようになったことは幸であった。

池田教授といえば、豪快でざっくばらんという印象は、誰しも一致することと思う。手術にしても大変豪快と思えた。しかし、手術のことで相談に伺うとレントゲンを仔細に眺められるだけでなく、よく人体骨格を手にして手術手技を考えられておられたことがあり、また、新しいアプローチを試みるために学一の解剖実習の所まで行かれてライへで解剖を確認されたこともあるとのこと話を伺ったこともあって、豪快さの裏には充分な準備が裏打ちされていた。

現在の御病状からみて先生のお元氣な姿を再び拝見することは不可能であろうが、最近お嬢様が御結婚されたことは、先生も病床で大変喜ばれておられることと思う。

若き日の池田教授

池田 彬 38

昭和三五年に我々が入局した時、教室のスタッフは岩原教授、池田助教授、泉田講師という黄金のトリオであった。昭和三五年というと教室もまだ規模が小さく、慶応に在る医局員は二〇名位で、大病院であっても整形外科のない病院がかなりあり、整形外科が診療科として独立していても一人医長である病院が半数位だった時代、医局で初めて「ポッポちゃん」というあだ名の女性秘書を雇った頃のことである。

池田助教授は当時四〇才で、柔道で鍛えた巨体に、丸顔の童顔にかけた太縁の眼鏡と、波打った黒髪が印象的であった。性格は豪放磊落で、快活で気さくであり、岩原教授が怖しくて近寄り難い威厳を身辺に漂わせていたのに対し、我々フレッシュマンにも気軽に話しかけたり、お茶をおごって呉れたりしたものである。例えば、我々が外来でベシユライバーをしている時、「池田君。ヨハンソン・シンディング・ラルセン症候群で知っているかい？」等と問いかけ、我々が眼を白黒させていると懇々と説明してくれる。後で、その月の「整形外科」を読む

と、池田助教授の話題が大低載っていたので、は、あ、先生は人に話すことにより記憶されるのだなと思いがつたが、あまり構って貰えないフレッシュマンにとっては何よりも嬉しく感じられた。

その頃の講義は、臨床講義が岩原教授、系統講義が池田助教授と泉田講師の担当であった。岩原教授の講義は「不肖岩原が……」を連発する名物講義であり、泉田講師は講義中、檻の中の虎のようにぐるぐると教壇上を歩き廻るといふ癖があったが、池田教授のそれはあまり特徴のない、淡々とした、しかし博識な、内容の濃い講義で、学生時代にはいささか難し過ぎ、入局して実地の経験を積んで、初めて理解しうるような質の高いものであった。

実に冷静、沈着であった。私が講義係であった頃、岩原教授が退職され、教授職を引き継がれた時、岩原教授が学生に試験をしていなかったたので、点数のつけようがなく、教務課から催促されて大変講義係として困ったことがある。止むを得ず、池田教授にいかゞいたしましたよ、うかと聞きに行くと、いささかも慌てず、騒がず「池田君。出席簿は持っているかね？」と言われた。早速、出席簿をお見せすると、「全出席にはA、五割以上出席はB、それ以下はC、一度も出席していない者にはDをつ

けて呉れたまえ。」と言われた。

当時の整形外科学会は岩原、天児、三木、片山の四巨頭が牛耳っていた時代であったが、池田助教授は次代を担うホープとして、東大の津山、慈恵の伊丹、新潟大の田島助教授等とトップを走っており、学会での発言の頻度、テーマの多彩さで断然群を抜いていた。

専門領域として手の外科、骨腫瘍を手掛けていられたが、何れも我国の学会の草分けで、最高権威の一人であり、スポーツ医学会の代表として、ローマ・オリンピックにチーム・ドクターとして参加された。

しかし、とりわけその名声を高めたのは脊椎外科の研究であった。それ迄の整形外科では、岩原教授が昭和十九年に脊椎分離症に対する腹膜外前方固定術を開拓されていたとはいえ、脊髄腫瘍を除く脊椎疾患の手術は誠に寥々たるもので、僅かに脊椎カリエスに肋骨横突起切除術等の姑息的な手術が行われていたに過ぎず、椎間板ヘルニアは椎弓切除をしてやっと剔出が可能という程度であった。

池田助教授は香港のホジソン教授のもとに留学され、頸椎から仙椎に至る前方侵襲法を導入し、基礎的研究を積み重ねて学会に報告し、東大を初め他大学に前方固定の実地指導に赴かれるなど啓蒙に努められた。真に、本

邦の脊椎外科の礎を築いたのは池田教授であると言っても過言ではない。

豪放、磊落で、些事にはこだわらなかつた。ある時、学会の下調べを三六回生の矢部、野末、小林先生等に依頼されたことがあった。一同熱心に働いていたが、段々疲れて空腹になって来たので、「ビールを取ろうか?」「ついでに鮫も食べよう」ということになり、じゃんじゃん飲み食いして、つけは池田助教に廻したが、顔色も変えず「ホーカイ（これは口癖でそうかいと言っているのであるが、我々にはこう聞えた。）」と喋って支払った。

手術に際しても豪胆で冷静であつた。腰椎の前方固定で椎間板を切除している時、パンチで咬っていると神経根がよろよろと出て来たことがある。助手は一同さつと蒼ざめたが、本人はいたって平気なもので、「君達これが神経根だよ。よく見て置き給え。」と言われた。又ある時、脊髓癌転移の椎体全剝術をしていた時、出血量が二万ccに達したので、堪りかねた麻酔医が「先生!出血が二万ccに達しましたが」と言った。池田教授は少しも騒がず「ホーカイ。三万ccになったら、又、教えて呉れ給え。」

その池田助教が冷静を失われるのを見たのは岩原教

授の後任を教授会の行われた日のことである。泉田助教は既に小児病院に赴任されていたので、強力な対立候補はいなかつたが、岩原教授が意中の後任者を最後迄明らかにされなかつたので、先生は朝からそわそわしていた。教授会が終り、岩原教授が医局に来られて「決まりました。」と言った時「そうですか。有難うございます。」と答えられたが、その眼は心なしに潤んでいるように見受けられた。

かくして、医局は池田教授を頭に戴き、改革の時代に突入して行つたのである。

池田亀夫先生の想い出

内 西 兼 一 郎 (特)

池田先生(当時助教)と初めて親しくお話できたのは、私が教室三年目の昭和三八年夏の岡山国体のときでした。*スポーツによる第一肋骨疲労骨折」というテーマで、国体のときに同時に開かれる日本体力医学会で発表するため先生と二人で参加しました。

当時、若い医師の発表のために指導医がわざわざ学会に同行するときは、発表者が往復の列車やホテルの手配をするのが慣習でした。前日に岡山までの夜行寝台車の切符をもってお部屋に伺うと「御苦労さん、幾らだった」といわれ、強く辞退するにも拘らず、切符代を返されませんでした。その上、宿泊は先生の知合いの家で無料となり、また車中では食事を御馳走になり大変恐縮しました。このように、先生は真の学者らしく、おかねに活潑であられ、また私共無給教室員に色々と心くばりをされていました。

学会が無事に終了したあと、国体選手と一緒に廻った岡山県観光は、それこそとてもさわやかで楽しいものでした。

私が伊勢崎市立病院に勤務しているとき、今井望足利日赤医長から、両毛地区研究会にみえた池田教授の懇親ゴルフに出るよう指示がありました。まだ嫌々ゴルフを始めたばかりでしたので、仕事を理由にお断りしますと「君が教授の相手に一番よい……」とのことで無理に引っ張りだされました。

私がショットするたびに、池田先生の楽しそうな高笑いとお指導があり、先生はすこぶる上機嫌でした。今井先生はきわめて堅実でミスが少なく、並木見而大田医長

はプロ並みの腕で、お二方とも池田先生のパートナーには相応しくないことが、よく判りました。

その後、何回かゴルフの同伴をしましたが、最後まで私のゴルフは、先生のためのようなゴルフでした。いよいよ勝負という頃に、先生が病気で大好きなゴルフを断念されたのはとても残念でなりません。

昭和五二年度の日本手の外科学会は第二〇回と区切りがよく、池田教授が当番幹事に推挙された学会でした。幾つかの強烈なエピソードがあり、生みの苦しみが数年続いてからの幹事推挙でしたので、何とか無事にかつ立派に運営したいと思っていました。前回や前々回の当番幹事の大学のスタッフの人に苦労話を聞くと、一般に教授がすべてこまかいことまでに指示をだされ、下働きのものは絶えず連絡をとっていないとミスがやすく、とても心配りがいり大変であるということでした。

しかし池田教授はあの鷹揚さで、「君達にすべて任せから、しっかりやって下さい」といわれました。これだけ部下を信頼して下さる教授は少ないのではないかと、これに充分にお応えしなくてはならないと考え、手の外科グループの伊藤恵康、岡義範の両君と一緒にアウトラインを作り、池田先生の許可をいただいたのちに、教室スタッフの先生方の協力を仰いで、兎も角も立派な学会

運営ができたと自負しております。

池田先生が大教授らしく、ポイントとなる大切なところは自分で抑え、あとのことは私共を信頼して下さったことには、深く感謝しています。

京都で開催された昭和五三年の SICOT には、手の外科の重鎮 Bross の直弟子である Starb 博士夫妻がみえました。博士は、前年の慶大当番の手の外科学会で特別講演をされ、池田先生と親しくなり、その後先生の御令嬢和歌子さんが、アメリカ留学中にいろいろとお世話になった方です。

京都の某料亭で、Starb 博士夫妻、池田先生、御夫人、和歌子さん、私共数人の医師が会食をしました。アメリカ留学で通訳の資格もある和歌子さんの堪能な English に先生は目を細めておられました。彼女の冗談で Stark 夫妻が笑いころげると、少し遅れてよく判られないからでしょうが、池田先生が笑われ、盃を重ねておられました。

日常の教授という肩書からのストレスがとれて、本当に楽しそうで、時にポツリと話される家庭のことなどと併せて、立派な家庭人であり、父親であられたことがわかり、とても微笑ましい光景でした。

沢山ある先生とのエピソードのうち、ほんの一部を書い

てみました。先生が教授になられてから積極的に推進された研究班活動は、小さな種、芽からすくすくと育ってきて、今や大樹になったといっても良いと思われれます。各分野における若い研究者の活躍は著しく、これもすべて先生の立派な御功績の一つといえましょう。先生の御退職の後は、あとに続くものが、さらに一層努力してゆかねばならず、必ず御期待に添えるものと確信しています。いつもニコニコと微笑んでおられ、少々のことには決して怒られない先生が、不幸にして現在病魔に倒れ、懸命に闘っておられますが、一日一刻も早い御快癒を願ってやみません。

長い間、私共教室員を御指導、御鞭撻いただきました。本当にありがとうございます。

池田教授の現役時代

有馬 亨 42

昨年（五十九年）六月、札幌で行われた第五十七回日本整形外科学会での総会で五人の名誉会員が承認された。

池田先生もその一人であった。しかし会場の厚生年金会館の演壇に先生のお姿が見られないのはやはり残念であった。その立派な表紙の名誉会員証はいま先生の病床の傍におかれてある。

池田先生が二度目の発作でお倒れになられてから今年一月で丸六年になる。脳幹部出血であったが幸いにも一命はとりとめ、以来病床に臥しておられる。五十六年九月以後は慶応から国立箱根病院に移られ療養されている。先日お見舞いに伺ったが、声をかけると目を開けられ頷いておられた。しかし淋しいことに往年のお元気さはみられなかった。

筆者が先生に接したのは今から約二十年前の昭和三十九年四月に入局してからである。その頃の医局は別館三階にあった。狭い医局に全員が集り、岩原教授がお出になるときはフレッシュマンの座る余地はなかった。池田助教授、泉田講師、松井医局長をはじめとくに体格の大きな人達が多かった。

その頃の池田先生は人一倍大きく頑健なお身体はバイタリティそのもので、フレッシュマンの筆者らからみると信頼性に値する風格が感じられた。

先生は人のことを話すときよく「奴さん」と言い、何となくユーモラスに聞えた。また自分のことはワシと言

っていたように思う。「ノルウェーの奴さんが最近胸椎の巨細胞腫を後ろからアプローチして腫瘍をとっておるが、ワシに言わせればあんな方法では視野が悪く大したことは出来っこない」という調子である。

この奴さんはステナーという人で、胸椎の血管性腫瘍に対して後方から複数椎体を摘出し見事な脊柱再建術を報告している。しかし前方アプローチの先生にかかってはかなわない。

先生は筆者らが入局してからは主として脊椎外科に関心を示されていたが、それ以前にすでに広範囲にわたって多くの業績が残されていた。すなわち脊髄損傷、骨関節結核をはじめとし、骨折、手の外科、骨腫瘍、スポーツ外傷および末梢神経などである。

今回ここに書く話は主として昭和四十年から四十五年頃のものである。

昭和四十一年の日整会には先生は「脊椎椎体剥出の経験」と題し、前方侵襲による椎体腫瘍剥出の中間成績を報告した。この中で最大の問題点は何とんでも出血量の大なることの悩みであった。しかし先生の果敢なアプローチは高く評価された。

筆者が入局三年目での受持ち患者の話である。

ある日、中年女性で両下肢不全麻痺の患者が慶応に入

院した。某大学からの紹介で胸椎腫瘍に椎弓切除術をしたが改善がみられなかったという。品の良い面長の顔立ちであるが、両下肢が不自由で気の毒である。

先生は胸椎のレントゲンフィルムをみるなり、

「これは巨細胞腫だ。とるしかない。」

池田先生執刀の下に左側開胸アプローチで入り第十胸椎を展開した。筆者は第三助手の下っ端で入った。

肋間動脈を結紮しいよいよ腫瘍を摘出する段になった。

リウエルで一かじりした途端、目の前が真っ赤なベールにつつまれた。よくみるとあたかも鯨が潮吹くごとく椎体から出血している。先生はすみやかに両手で押えたが胸腔内は血の海となった。全員交代で何十分も押えた。この間少くとも五リットルは出血したと思われる。

漸く出血も少くなつたが、この時ばかりはさすがの池田先生も諦めて胸腔ドレーンを入れ閉胸した。診断は血管腫であった。

術後の血胸は何日も続き全身管理に難航した。筆者は一週間ほど泊り込みや々と落ち着いたときには術者ともども安堵したことが思い出される。

この頃、脊椎血管腫の椎体置換術を行えるものは池田先生を置いて他にはなく、先生はすでにいくつかの成功例を持っておられた。これらはそれぞれ教室員の症例報

告となっていた。

四十一年十二月、池田先生は岩原先生の後任として教授に就任された。

翌四十二年四月、名古屋における日整会において協同研究として「椎体侵襲に関する諸問題」につき演説された。

症例数は五一六例と多く、腫瘍、外傷、炎症などすべての疾患を対象としてあらゆるレベルでの前方アプローチを網羅しており、まさしく圧巻であった。とくに胸椎でのカリエスは圧倒的に多く、その胸膜外アプローチは先生の御家芸であった。

この頃は入局五年目位になると腰椎前方固定術の許しを得ており、脊椎分離症に対しても積極的にその適応がつけられていた。

一方研究室においては脊椎固定術の基礎的実験や椎間板障害などの研究が盛んに行われていた。また生化学の研究が始められたのも此の頃である。

木造のは号棟の研究室は深夜まで賑やかで活気があった。その頃四十回生から四十三回生位までの連中が仕事をしていた。

狭い実験室で何人もが実験しているため、自分の大事な実験追跡中の兎をうっかり離しておく、いつの間

か他人の実験に供される寸前という場面もあった。

池田教授は時折夕方以後に研究室にお出になった。筆者が病理解剖から取りたての腰椎柱ブロックを解剖していると、逆にその日の手術の反省にしたいと取り上げられ手伝わされる羽目になったこともある。

先生は解剖には大変ご熱心であり、後で病理の小使いから聞いた話だが、手術のアプローチを覚えるために何度も病理解剖へ通われたとのことである。

この小使いさんはなかなか気難しく筆者が漸く信用してもらえらるようになった頃、

「池田は今どうしておるか。あれは熱心な男だから出世するよ」とほめていたのは傑作である。

ある日研究室で夜分、二三人の仲間と酒を飲んでいると先生が入って来られ、机の上の一升ビンに視線が集中した。その顔はややひきつり研究室は酒を飲むところではないと言わんとしていることが察しられた。

ところがコップ一杯冷酒をおすすめすると、もともとお嫌いではないところで、ぐーっとうまそうにお飲みになった。しかし何となくいつものお元気がなく、やや落ちこんでおられる感じを受けた。

その四―五日後の四十三年夏、出張先の病院で軽い脳血栓を起こされた。

非山病院でリハビリ訓練を行い、また食餌療法で見違えるほど減量しその年の秋に復職されたときは皆をほっとさせたものである。

折しも秋の結婚シーズンが始っており、いわゆる医局適令期となった筆者の同級生は待ちかねたように続々と結婚した。病み上がりの先生にとって仲人の仕事は大変であったと思う。

翌四十四年には筆者も主論文の発表が済み、五月には同級生の真打ちを勤め先生にお世話になった次第である。その年から平塚市民病院へ出張することとなり、先生にお会いすることも少くなった。

四十五年から慶応に改革の波が押し寄せ、新たな職制がしかれ先生は教育主任となられた。臨床のお好きな先生はこの職務に物足りなさを感じられていたように思える。このため関連病院で手術をされる機会も増えたように、筆者が今の東海大学に五十年六月赴任するまで平塚や東二で時折お会いすることがあった。

その後、運命のいたずらというべきか五十三年十一月教室主任に選出されたその翌年の一月に先生は発作に見舞われた。

以後、闘病生活を余儀なくされ復職されることはなかった。誠に残念である。

今ここに先生の現役時代を思い出すとき、「ほーかい」とよく相槌をうっていた声が聞えてくる。手術の感覚はすばらしかった。豪胆にして繊細なところが印象的であり、手術の流れに勢いがあった。勿論これは先生の本来の素質にもよるのであるが、やはり身につけられた努力の積み重ねが自信となっていたのである。

昨年四月、先生は箱根で療養中のまま退職され名誉教授となられた。箱根病院では野間院長をはじめ主治医の石黒君や皆さんが大変良く面倒をみて下さっており頭が下る。またご家族もご療養の環境には安心されておられると思う。しかし段々と先生の存在が教室、同窓から今後疎遠になるような気がしてならない。

『池田教授の下で』 学位論文研究のころ

津布久 雅 男 43

池田教授在任の二十年間は学園紛争の激動と收拾の時期にあたります。国内では高度経済成長長期から、第一次第二次オイルショックによる戦後はじめての社会・経済

の転換期でもありました。

私にとっては、大学院での研究・村山療養所勤務、そして開業の時期にあたります。

組織の中にいる人間にとっては激動の波に流されてしまうのは何ともしがたいことです。この混乱のあらしの中で時代の波を作ろうとする人、またこれを鎮めようと努める人等、立場のちがいによって人間が赤裸々な姿をむきだしつつ戦い、創つき倒れるのも人間社会の常なのでしょう。組織の中の一人一人の人間の力は、あまりにも弱いというのに、池田先生はまさしくこの社会と学園の激動期に教授に就任し、三年の華々しい活躍のあと、脳血管障害で二度まで倒れながら終始、整形外科教室の連帯を求めつゝ、教室員の一人一人に愛情を傾け続けたと信じるものであります。またそれに応えて教室の人々もそれぞれに力を尽くし、先生が倒れた後も決して見捨てなかったのだと思います。

私が富士川君と大学院に入ったのは、昭和四十年の春です。一級下は新名、水島君でそのあとは紛争のため大学院は有名無実となり誰も入りませんでした。岩原先生から池田先生への過渡期は平林先生や土方先生が後輩達の面倒をよくみてくれたことを思いだします。臨床は野口・矢部・赤坂・池田・野村等の諸先生に患者をみる上

での心構えや注意を教わり、研究室では平林・土方・有馬先生等から研究態度や方法を具体的に仕事を通して教えられました。入局後二年程の間に間歌的でしたが、三施設に各々四ヶ月程出張しました。平の福島整肢療護園の月村先生や済生会神奈川病院の桜田先生や花岡先生、塩原温泉病院や浅葉先生達を通して、勤務医のつつましくも誠実な生活を教えられました。また週一回の出張でしたが水戸の佐藤先生や木城先生、平塚の仲川先生には大変お世話になり、小手術ながら貴重な経験を持たして戴きました。そして経済的にも大きな支援をうけたものです。岩原先生から戴いた初めての論文ができたころ、池田先生から『頸椎損傷の発生機序に関する研究』をするように言われました。当時、高度経済成長と軌を一にして、交通事故、建設工事での事故、スポーツ事故が激増しつつありました。とりわけ、頭蓋・脳・脊椎・脊髄損傷が社会問題化しつつありました。京大の半田教授（脳外科）を座長に文部省の特定研究班が組織され、私学では慶応の整形外科と生理学教室が参加しました。さらに翌年には日整会でも『鞭打ち損傷』が主題としてとりあげられ、続いて『脳神経外傷研究会』が東大佐野教授（脳外科）と共に主宰され発足しました。池田教授から市ヶ谷自衛隊駐屯所の先輩・斎藤先生を紹介され、

斎藤先生から立川市の航空医学実験隊（隊長大島東大教授）に御連絡をいただいたのはこのような時期でした。そして実験隊の湯木部長・松本課長の指導で『衝撃実験装置一式』を使わせてもらうことになったのです。鞭打ち損傷の動物実験には三谷・浅井先生が猿を飼入れて早速準備にあたり、私はその間隙を使って頸椎損傷の予備実験をさせてもらいました。自衛隊の衝撃実験装置は加速度計・超高速カメラ・分析機器を完備しているので鞭打ち損傷実験には大変都合です。しかし頭部を打撃することで頸椎損傷をおこそうとするには、速度や衝撃が大きすぎて、頭蓋や脳損傷ばかりおきてしまいます。中には上位頸椎脱臼例もありますが下位頸椎には全く損傷がおこらないのです。予備実験の段階で猿を八匹も使い、先行き不安のため池田先生に相談した結果、ウサギを使用することになりました。その後しばらく試行錯誤が続きました。そして結局は暗礁にのりあげたのです。池田先生の命令で丁度高岡から戻った小林慶二君と改めて協同研究するように言われました。二人でいろいろ相談の結果、設計し製作させたのが自家製の頸椎損傷衝撃実験装置なのです。実験は悲観・思索・孤独型の私と樂觀・行動・協調型的小林君との組合せですから、何やかや言いながらも順調に進みました。誤って宮本先生が長

年飼育したウサギをギロチン台の犠牲として御迷惑をかけてしまったら、実験後のウサギを捨てるのが惜しくて、肉屋にかけあったがことわられたりしながら……。実験は毎夜おそく迄続けられました。実験を続ける一方で頭部を打撃して頸椎損傷がおこるのは、高速の衝撃的な力では上位頸椎でおこりやすいのではないかとということ。

下位頸椎損傷は頭部打撲によっておきるということも極めて低速の小さな衝撃でおきるということも極めて低速の小さな衝撃でおきるのではないかとという想定がなされるようになってまいりました。そして鞭打ち損傷例をはじめとして、頭部・頸椎・頸髄損傷例の綿密なレントゲン検査を行っていくようになったのです。そして上位頸椎損傷に関する臨床報告が一つ二つと出るようになってまいりました。この間、池田教授は忍耐強く私共の研究を見守ってくださったと思います。昭和四四年一月、日立で池田先生が倒れたという報せは私達にとっては青天の霹靂でした。私はこの年の七月から立川病院へ出張しました。そしてさらに一年後、国立村山療養所へ転動しました。池田先生が倒れてから、泉田先生が国立小児病院から慶応へ戻られて、池田先生の代行をされるようになりました。

村山への転動後、学園紛争は激しくなる一方で私は慶応からは益々足が遠くなるばかりでした。切角の学位研

究の資料も部屋の片隅でほこりがつもるような状態でした。こんな有様では池田先生や研究室の先生にも申しわけがたたないと勇を鼓舞して一年がかりで論文を仕上げ四六年六月に小林君とともに病氣回復間もない池田教授と五味教授、島井教授、工藤教授等の審査をうけ学位を与えられました。私達はこれでやっと池田先生にわずかながらでも恩返しができたと思いました。

そして私自身は村山で岩原先生の指導で新たにリウマチ外科の仕事を始めようと決心したのです。上位頸椎損傷の臨床研究の方は小林君が継承発展させてくれるにちがいないと確信していました。そして、事実そのようになりました。その後のことは池田先生の身近にいらなかったので私には何を書く資格もありません。唯、先生は御自身の病気に悩みつつも医学部紛争の解決をめざして努力する中で寂しく苦しい忍耐の時期が長くあったと思います。

先生はこの間『教授会および教授の権威の回復』と『教室の連帯』を願っていたと思います。先生は二度目の発作で動けない状態となりましたが、教室に残られた一人一人の先生方にこの願望がよく理解されていたからこそ、最後まで池田先生を御世話されたのだろうと思って医局の皆様感謝を新たにしている昨今です。

池田教授の御退官に際して

— 生化学研究と池田教授 —

防衛医科大学校
整形外科 新 名 正 由 44

教室から池田教授の現役時代の御様子を紹介するようにとの依頼をうけた。私が慶応義塾大学医学部整形外科学教室に入局したのは昭和四十一年であるから、はや二十年を経過したことになる。過ぎ去った日々を振り返ってみると教室で出逢った多くの先輩、後輩の事、出張病院での事などが想い起こされ、本当に懐しく思う。

入局当時、主任教授は岩原先生であった。しかしまもなく岩原先生は御退官されたので私と水島斌雄君が池田新教授の最初で最後の大学院生となった。当時は東大紛争をはじめ、インターン闘争、医局解体運動などの嵐が吹きあれ、信濃町の学舎も騒然となり、大学院制度は博士号に代表される医局封建制度の代名詞の如くみなされ、その後大学院生の採用は中止されてしまったからである。

池田先生が教授に決定した瞬間のことは今でも鮮明に記憶している。野口、矢部、伊勢亀、赤坂、平林先生をはじめ、当時の在局者が全員待期する別館四階の医局に

池田先生は蒼ざめた緊張の面持で入って来られた。ビールでの乾杯も、張りつめたような緊張感の直後のことで、いま一つ盛り上りに欠けたように記憶している。

池田先生の新教授としての目標は新しい基礎研究技術を導入し、研究体制を整備することと、臨床面では関連病院ベッドを含めた日本一の整形外科診療体制をつくり上げることにあった。その為にまず生化学の導入がなされた。骨のヘキソサミン、アミノ酸、コラーゲンなどの研究題目が関、真崎、富士川、水島そして私に与えられた。医化学教室への学内留学も開始された。全く新しい研究面であり、先輩の助言を求める事も出来ず五里夢中の思考錯誤のくり返しであった。

大学院出身者と在院者を中心に朝の勉強会も始まった。結合組織のコラーゲンやムコ多糖、石灰化学等の生化学に関する新刊書がテキストに扱われ、週一回医局で行われた。今振り返ってみるとまさにしどろもどろの抄読会であったが、池田先生は真剣な面持で耳を傾けて下さり、我々はその熱意に引きずられていたようであった。

まもなくリハビリテーション学会、リウマチ学会のシンポジウムの発表の一部に生化学データを含まれることが決定され、我々はその為の実験に熱中することになった。整形外科外来診察室で夜の研究セミナーが開始されたの

もその頃である。医化学の地下に与えられた実験室は我々の夜の溜り場となり、新たに実験に参加した斉藤、柳下、横山を加え立錫の余地もない程であった。しかし医局における評価は「臨床とかけ離れた何か理解し難い事をやっているグループ」といったところであった。

学生時代、生化学におよそ縁のなかった私が、東京医科歯科大学硬組織研究生化学に留学することになったのも不思議なめぐりあわせと言う他はない。池田先生を教室に訪ね留学の希望を述べた時は、さすがの池田先生もしばし思案の態であった。そして「君がそのような気持ちでいてくれるのは大変嬉しいことだが、この時期一年間臨床を離れることは犠牲も大きい。臨床の遅れは本人の自覚さえあれば決して取り戻せないものではないが、人一倍の努力がいる。もし君がそれを承知で言うのなら、むしろ私の方からお願いたい位だ」と申された。そして翌日私と共に永井裕教授を医科歯科大に訪ね、直接お願いして下さった。一見豪放、無頓着にみえられる池田先生からこの様に対処されたことに強い感銘を受けた。後年私が更に進路を変更することになった際も、実に適切な御忠告を賜り、先生の慧眼に頭の下る思いがする。

昭和四十七年第四五回日本生化学会は関田会長のもと、日吉校舎において開催された。シンポジウム「結合組織

の生化学」は池田先生が座長で私もシンポジストの一人に選ばれた。病も癒えた後の事で、池田教授の夢の実現に少しでもお役に立てたことが嬉しかった。しかしその後は大きな発表や研究にお役に立てずに終わった事を淋しく思う。

生化学班はその後も暁、長沢、中川（智）、中川（研）、生越、柴崎、丸谷、斉藤、等々数多くの人材が研究を継承し現在に到っている。私は昭和五十二年より防衛医大に赴任したため直接の指導は出来なくなったが、慶応でもその灯は絶えることなく燃え続けている。防衛医大でも横井、山岸、藤田らが研究の一翼を担ってくれた。

日整会は整形外科基礎研究会を昭和六十一年より、日整会直割学会とすることを決定した。基礎委員会も常置され、基礎学術総会開催の為の規約整備も行われた。私がかつたことに終始たずさわって来られたのも池田先生の卓越した先見性とその実現にねばり強い努力を惜しまなかった生化学グループ全員の協力、そして研究の遂行を容認して下さった慶大整形外科の伝統の力に他ならない。泉田日整会々長の年に記念すべき第一回日整会基礎学会が開催されるのも因縁という他はない。

本稿が池田先生と生化学班に関するこのみに終始したことをお許しいただきたい。

池田先生の御退官にあたり、これらの経過の全てを承知している人も少くなり、何時かは忘れ去られてしまうであろう。

しかし、現在もなお教室に脈々と息づいている生化学研究の創始者は池田先生に他ならないことを記録にとどめたいと思ったからである。

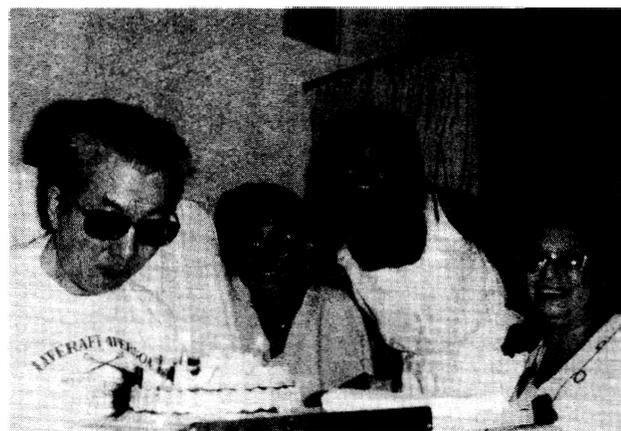
池田先生の一層の御長生を祈り上げます。



箱根での池田教授

国療箱根病院 石 黒 隆 (51)

今年の三月、池田教授が定年を迎えられ、慶応大学の名誉教授、そして、日本整形外科学会の名誉会員になら



れたこと、箱根病院での主治医として非常に感慨深いものがあります。

先生が元気に活躍されていた頃の思い出は諸先輩方にお願ひして、私は先生が箱根病院に入院(昭和五十六年九月)されてからの

思い出を紹介させて頂きます。

池田先生は整形外科学教室の現職教授であると同時に、私にとっては仲人でもあり、また、柔道部の部長、麻痺手の分野における大先輩でもあります。箱根に来られるまでに、数回の発作と誤飲による肺炎をしばしばおこされたと聞かされておりましたので、先生が箱根で療養されると決定した時は非常に不安でした。箱根に入院されてから、もうすでに三年が過ぎ、再発作を起こされることもなく、無事、ここに定年を迎えられ、現在に至っているのは箱根病院の看護婦さん達の努力に負うところが大きかったです。

先生が教授として活躍されていた頃（久保院長時代）、わずかに年数回、元気な後ろ姿をみるにすぎなかった看護婦さん達にとって、池田先生が箱根病院で療養されると聞かされた時、教授として扱うのか、一人の患者として扱うのか非常に迷ったそうです。この三年間、一番深く先生と接してくれた看護婦さんと池田先生とのかかわりを中心に紹介させて頂きます。

一、入院当初

入院された当初は、今までの病院と同様、先生は個室にはいられました。奥さんも先生が箱根に慣れるまで付き添われていました。

言語障害があるため、意志の伝達が大変で、こちらが先生の顔の表情をみて判断しなければなりませんでした。看護婦さん達も、「先生はしゃべらないけど、頭の中にちゃんとしまいでいて、いつか、しゃべり出し、箱根の看護婦はあーだ、こーだと言われるかもしれない」と言い、言葉には気を使っていました。彼女達が「先生は話せるようになったら、私達の今までの接し方を怒るんでしよう」と言えば、「イイエ、怒らないよ」と顔で表わし、「本当ですか」「ウン」と先生がうなづく光景もしばしば見られました。

言葉を話せなかったことがある意味では良かったのかもしれませんが。彼女達はいろんな世間話を池田先生にしてあげていました。「買い物とか旅行の話をする、先生はうなづかれ、何ともいえない微笑みを見せてくれるんですよ。教養のある人の微笑みが何ともいえない」とよく彼女達から聞かされました。また、彼女達は池田先生にレントゲン写真をみせ、「先生、どこが折れているんですか、どこが悪いんですか」と骨折やミエロの写真をよくみせていました。その時、先生はじっとレントゲン写真を見つめ、興味を示されておりました。そのようなやり取りが繰り返されていくうちに、看護の体勢がとれるようになりました。

二、大部屋への移動

奥さんも小田原にアパートを借りられ、看護の体勢も慣れてきた頃、現職の教授ではありましたが、個室から大部屋に思い切って移すことにしました。個室にいるよりも、いろんな患者さんのいる大部屋が先生には刺激になって良いとの判断からでした。大部屋では、周囲の患者さんに対する配慮から、彼女達には池田先生を一人の患者さんとしてとらえ、他の患者さん達と同じ扱いをしてもらいました。

大部屋では手術を受ける人、術後の後療法やりハビリをする人がいて、絶えず刺激となり、結果的にみて、先生を大部屋に移して非常に良かったと今でも思っています。

三、患者としての池田先生

最初のうちは、誤飲でムセるため、あまり水を飲みたがりませんでした。できるだけ水を飲んでもらうように努力してもらいました。そのうち、自分でコップを持ち、水が飲めるようになったため、ある程度の尿量が確保されるようになりました。

先生を患者としてとらえた時、忍耐強く、行儀が非常にいいというのが看護婦さん達の一致した評価であり、まず絶対「してはいけません」と注意されたことは、まず絶

対に守ってくれる。これは他の患者さんにはなかなか真似のできないことであります。病床の身であっても、プライドを絶えず持たれている池田先生、「教養のある人はちょっと違いますね」と、彼女達から言われると、慶応の人間として誇らしく思えます。

仙骨部の痒みだけはどうしようもないらしく、時々掻いて出血することがある。看護婦さんが掻いてあげると、先生は氣持良さそうにする。「言語障害のある患者さんの場合には、とくに、痒いところに手を届かせる位の注意深い観察が必要です」と、聞かされ、看護の基本に接した氣持になった。

先日、東海大から口腔外科の先生に来てもらい虫歯を九本抜いてもらいました。局所麻酔はしてあるが、じっと我慢され、処置中に一度も手を出されることもなく無事抜歯を終えることができた。先生にとって無影灯を手術台の上でみるのは多分初めてのことであったと思う。ぐっと無影灯を眺めながら、その時の状況を判断され、処置の終るまで、じっと我慢されたこと、今でも強く印象に残っている。

四、奥さんのこと

小田原にアパートを借りられ、病院にはよく来られる。奥さんのいらした時の先生の表情は違う。今まで眠そう

な顔をしていても、目が輝いてくる。

次のようなエピソードがある。奥さんが風邪のため、しばらく面会に来られなかった時、ある看護婦さんが、「奥さんはもう来られません。先生、離縁しちゃいましょうか」と冗談で言ったら、先生は激しく頭を左右に振られ、ものすごく悲しそうな顔をされたとのこと。看護婦さんはびっくりして「ゴメン、ゴメン、先生、今のは冗談、冗談ですからね」と謝り、すぐに、奥さんに電話をいれ、面会に来てあげて下さいとお願いしたそうです。今でも、奥さんがいらしている時の池田先生の目は輝いています。非常に素晴らしい愛情物語です。

箱根での療養生活も三年を過ぎました。その間、大した発作をおこすことなく、現在に至っています。病床の身であっても、みんなに愛され、可愛いがられる池田先生、これからも出来るだけ長生きして下さい。



ヨーロッパへの旅

白田 正雄 (9)

最近シルクロードがクローズアップされて来た。これは紀元前仏教文化の華やかな時代で、印度を始めギリシャその他のヨーロッパ諸国との交流が盛んであったことを示している。

チンギスカンが大軍を率いてハンガリー遠征を企てたのは一二一五年頃で鎌倉時代であり、充分地理がわかったからであろう。

日本人で最初にローマへ行ったのは支倉常長であろうか。一六一三年で、大阪冬の陣の前年である。海路を行った。その後鎖国となったが、明治維新時のドサクサにまぎれ、長州藩の青年が他国船でイギリスに行ったことはテレビで教えられた。

明治時代、福島安正陸軍大将が若かりし日、単騎でシベリアを横断して帰[■]されたことは、我々長野県人としては特に忘れ得ないところである。

初代医学部長北里柴三郎先生が独逸に留学コッホの門下に入られたのは明治一九年で、その一月マルセイユ着

とあるから、当然海路であった。

シベリア鉄道の開通は一九〇二年明治三五年である。私をはじめヨーロッパへ行ったのは、昭和九年で、すでに半世紀五〇年前である。海軍の遠洋航海は、欧米、豪と毎年交互におこなわれたのであるが、幸運にも私はヨーロッパ行にぶつかったのである。

私達は昭和九年二月一日軍艦浅間で、僚艦警手と共に、多数海軍の将星の見送りを受けて、横須賀軍港を出発した。途中台北、マニラ、を経てシンガポール着。そしてそこからアフリカのヂブチ（エチオピアの入口）まで、印度洋を越すに、実に一六日を要した。石炭艦で速力八ノットだからちががかない。もっとも、途中演習もあって、横道にそれたり、遠回りをしたり、また赤道祭などの行事もあって一応楽しい旅でもあった。

ヂブチではエチオピアの皇太子アラヤアベバ殿下が来訪された。日本のお嬢様と結婚がとりざたされた時であった。出迎える我々士官と握手されたり、記念写真をと

ったりした。

紅海は地図で見るとアフリカとアラビアの砂漠の間にある。風が吹いて砂ぼこりがたつだろうと思つて、ごみよけ眼鏡を用意した。ところが行つて見ると紅海は巾二〇〇塗もあつて、航行中兩岸が見えなかつた。スエズ運河に近づいて海峡が狭くなり、アラビヤ側は全くの岩山だつた。

ポートサイドで石炭搭載がおこなわれた。それは少尉候補生の訓練でもあつた。こんなわけで土地の者から、あまり古い艦で日露戦争でロシアから分捕つたものかと思つた。

これより、トルコのイスタンブール。ギリシャのアテネ。イタリアはナポリ、ローマ、ボンペイ、ベスビオス山頂、リボルノの伊海軍兵学校。フランスはマルセイユ、パリ、ツーロン海軍基地のスペインのバルセロナ。マルタの英海軍基地。エジプトのアレキサンドリア、カイロ及び郊外キゼーのピラミット、スフィンクス。これ等を經てセイロン今のスリランカのコロンボ、キャンデー。そしてジャバ、パラオ、サイパンを訪れて横須賀軍港に帰投したのは七月三〇日だつた。いまでは考えられないようなゆつくりした旅で、その間の楽しい思い出は数えきれない。

当時我国は、第一次上海事変が一段落し、満洲国の建設は着々と進み、我々も上海事変の洗礼を受けた後、昭和八年度の連合艦隊で錬えられた直後であり、三大海軍国として意気揚々の時代であつたので、ボロ軍艦でも何のその、いばつて外国訪問のぞきたい、ご時勢だつた。

しかるに昭和一〇年代は第二次上海事変を中とした支那事変と之につづく大東亜戦争。二〇年代は戦後の窮乏からの立ちあがりと講和条約等の戦後処理。三〇年代は石油開発、安石油時代で思わざる高成長時代となり、世界は日本のためにあるかの如き神武景氣、岩戸景氣等とつたわつていたが、四〇年代の後半から五〇年代にかけて、石油ショックですつかりあぶらをしばられ、省エネルギー等と悲鳴をあげている次第である。

一方世界経済界の変動に平行して、航空機の発達が目まぐるしく、かつては夢にも考えられなかつた北極航空路の開発となり、ヨーロッパへの路は著しく短縮された。私は昭和五四年六月、国際ロータリー大会がローマにて開催された機会に北イタリア旅行をした。往きは南廻りで、アリタリア航空A乙七八九だつた。

六月四日一四・〇〇成田空港発。香港迄三時間五〇分。香港、バンコック間四時間。バンコック、ニューデリー間三時間三〇分。ニューデリー、アテネ間六時間三〇分

で、アテネでは日出直前で、その山々は、この一月ギリシャ旅行で見たばかりなので、ようこそと迎えられた気分だった。給油の後一時間三〇分でローマ着。日本時間一三時一五分、現地時間六時一五分だった。時差七時間（夏時間）で、各空港給油や座席整理、乗務員の交代等のため一時間から二時間止まっているので、合計二三時一五分を要したことになる。

昭和五四年暮から五五年一月にかけて、スペイン旅行をした。英国航空BA〇〇六（北廻り）。午後一〇時成田空港発。翌朝五時にはロンドンに着くことになっている。おそらく真暗のなかを時差の関係もあって、この時間に着くのだろうと思っていた。ところが、五時間四六分たったら薄明るいアンカレッヂに着いた。ここはまだ出発当日の午前九時で時計は逆まわりである。時差一九時間。

二時間後アンカレッヂ発。そして一〇、〇五〇米の雲の上に出る。右後に太陽が照る。一時間二〇分後左舷後に日が沈み、薄暗くなる。その後は真暗の中を突進し、予定通り朝五時にロンドンのヒースロー空港（Heathrow airport）に着陸した。アンカレッヂ離陸から着陸迄八時間七分だった。ロンドン時差九時間。成田を出発してから一六時間である。私達はここで乗り換えてマ

ドリードに行った。

昭和五三年の東京サミット会議の際、フランスのデスカールデスタン大統領は、ご自慢のコンコルド機で東京に乗り込まれたが、彼はパリを立ってシベリアのノボシビルスクで給油して、九時間で成田空港に着いたというのである。これはまさに時間単位の旅行といえよう。

昭和五四年のイタリア旅行で、帰日もAZ南廻りの予定であったが、その頃米国で飛行機事故があり、同型機の再点検が要求された。ところが私達が帰国の際乗る予定であったAZ機も点検の対象となり、飛行中止となったので、急拠日程を早めて、フランス機にてパリに行き、翌朝エールフランス航空AFでモスクワ廻りで帰ることになった。

一〇、〇〇ホテル発。一三・〇〇ドゴール空港をとび立つ。一時間位して下を見ると海上を飛んでいる。ハテどこの海だろう。まさか湖水ではあるまい？ 仏からモスクワ行だから、当然ドイツやポーランドの上空を通過するものと思っていたところ、突然出合った海に驚いた。あとで北極中心の地図を見たところ、これは、パリからデンマークへ飛び、バルチック海上をとんで、その東端の辺から南東に下ってモスコに飛ぶのが必ずしも遠くないことがわかった。地球は丸い！

したがって飛行機の左手に見えていた陸地はスウェーデンだった。機が海上から逆に移る時に半島を横切った。その際半島の形を書いておいたところ、地図上にそれと同じ形の半島があった。

モスコウで二時間休憩。現地時間午後六時（夏時間）発進。太陽は機の左舷後よりに輝いている。やがて八時十分翼端の後側に没した。そのまゝうす明るい一時間が過ぎた頃、翼端の前方が明るくなって来た。と見るうちに、朝日が上って来た。九時四〇分。その間一時間半である。ここはシベリア上空、北緯六三度、東径八〇度辺の地点であり、時期は六月一二日。夏至の前一日である。その後は勿論陽がカンカン照るなかをとんだ。機内では窓を閉め、配給の目隠しで目を覆い、わづかに眠った。

何時間たったか。機は日本海上を南下している。新潟県あたりであろうか。九〇度方向を変えて日本列島を横断した。山また山がつづいた。太平洋上に出た。しばらくして機は雲のなかに突込んだ。厚い雲の層でなかなか地面が見えない。しばらくして成田空港着。一〇・三（）である。モスコウをたつて九時間余である。空港は雨模様だった。

昭和五五年の一月、スペイン旅行の帰り、パリを早

朝に出てドイツのルフトハンザ機LH一一でフランクフルトに飛び、そこで別のルフトハンザ機LH六五八に乗り換えてシベリア上空を飛んだが、フランクフルトでは寒中でみぞれの天候のこととて、車輪が滑べって、出発が一時遅れた。今度はフランクフルトから陸上ばかりを飛んでモスコウに着いた。着陸のため下る前、太陽は機の右側に照っていたが、日没に近かった。厚い雲の層を突っ切って着陸した時はすでに薄暗く、みぞれが降っていた。現地人の厚い防寒頭巾が印象的だった。機を掃除し、出発の態勢が整ったので、再び乗り込み、出発したのは午後六時で、すでに相当暗くなっていた。時差で東京は午後十一時である。そして暗闇を縫って成田空港に着いたのが午前八時十分であるから、一夜飛んで夜が明けたら、日本に着いたわけである。九時間十分。

昭和五五年一月六日で、冬至を過ぐる十余日で、先には夏至で明るいなかを、今回は冬至で真闇のなかと、両極端のシベリア上空の旅が出来て思い出も深い。さらに私は海軍時代に「薄暮黎明における照度の研究」（昭和十一年度恩賜研学資金賞）で赤道（北緯〇度）から北海道の北緯四二度（昭和八年度連合艦隊）、つづいて昭和十年のサガレンのオハへの行動中北緯五八度に至る迄、各海域で日没から闇夜まで、闇夜から日出までの照度の

変化を調べたが、ここに北緯六三度辺の現象が観察でき、研究に頁が加わり、喜んでゐる次第である。

昭和五七年五月オランダ行のため北極回りをした。これは、北極からの最近距離六〇〇km離れた地点を通ると言う。北緯八〇度は北極から六〇〇哩離れた円だから、飛行機は八〇度線を越すとぶことになる。下を見ると凍った陸地が皚々とすばらしい奇観が続いていた。カナダの北部やグリーンランドだろう。勿論凍ったごつごつした海も眺められた。夕刻になる太陽は下ってくる。結局二度か三度位の高さと言おうか、そこからそのまゝ上っていった。夜明けに相当する現象である。

更に昭和五九年六月には同じ英国航空で同じ路を通った。この度に前回より一ヶ月夏至に近かったので、夕刻の太陽は十度か一二・三度と思われるところまで下り、やがて上り出した。

北極通過という磁石が気にかかる。昭和五二年の暮、私は始めて日航機で北極経由でフランクフルトに飛び、そこからイタリアのA Z機でローマに行った。

アンカレッチから持ち合わせの磁石を眺めていた。磁石ははじめから、五度位左方北極側に向っていた。ところが北極に近づく頃、動かなくなった。それから二時間あまりたって見たら、磁針は左後方北極をさしているの

で一応納得した。

そこで帰りにはもっと正確に計ろうと、態勢を整え頑張ったところ、磁針は左に動き出した。そして、北極の至近地点と思われるところを過ぎた頃、磁針は北極の反対側九十度を指した。その後漸次後に向っていった。この観測の途中本物のオーロラが見られたのもつけの幸だった。通りすがりのスチュワーデスを呼びとめ、「こういう現象になったがどういうわけか」と質問し、「えらい人に聞いて見てくれ」と名刺をやっておいた。帰途に磁針が左側に向うのは、北極は右側でも、北極磁は左側で、飛行機はその中間を通っていたことに気が付いて解結した。が往路の磁石の動きがわからない。

それから二ヶ月経ってのある日、彼女から返事が来た。前略、一月の初めでしたでしょう？ 北廻り便の帰途にて航空機内の磁石についての御質問を受けまして以来、ずっと気になり、いろいろな方におうかがいしていたのですが、やっと我社の GREAT CAPTAIN お名前は野間聖明様とおっしゃる、CAPTAIN 一期というおそれおおい方にそのお答を得ることができましたので、遅ればせながら、お便りさせていただきます。

野間 CAPTAIN によりますと、航空機内での磁石がさす方向というものは、何の意味もなきない。すなわち、

磁石のきかない状態なのだそうです。それでは御質問の方が医学博士であるならば、私の書いた本でその解答を得られるであろうとの御趣旨で、わざわざ絶版になってしまった御本をコピーして下さいたのです。結局、私の御返答もできず、お恥ずかしい次第です。云々。

スチュワードス二二八期 佐藤貞澄

こんな事情で佐藤さんから GRID NAVIGATION (PILOT用)を送って頂けた。

GRID NAVIGATION

Mag, Compassの代りに Gyro で飛行する。

Error のなら理想的な Gyro で地球自転の影響を除き去って Gyro Heading 一定で飛ぶと No windの時、その航跡は Great Circle になり、これは Chart 上はほぼ直線となる。

Polar Navigation の問題点

一、子午線が一点に集中してゐる。したがって極周辺では、True North を方向の基準とすることはできない。

二、極地では大なる Mag. Variation があり、磁気嵐の影響を受けて、Mag. North も方向の基準とすることはできない。

三、地磁気の水平分力がきわめて弱いため Mag. Compass

が満足に働かない。

四、春分、秋分附近では、薄明時間が長く、したがって天候もほとんど不可能であり、Radio NAV, AID も unreliable である。

五、利用出来る NAV, AID が少ない。

以上のことから極地の航法は Gvid Navigation に依らざるを得なくなる。

Mag, Compassの限界

高緯度地方になると、地磁気の水平分力が少ないため、Compassの方向を指す力が弱まり、わずかの外力で廻るようになり、方位を指す能力を失なう。

このため、緯度六〇度以上の北または南では、Mag. Compassの信頼度が落ちる。

JAL では六五度までと規定してある。

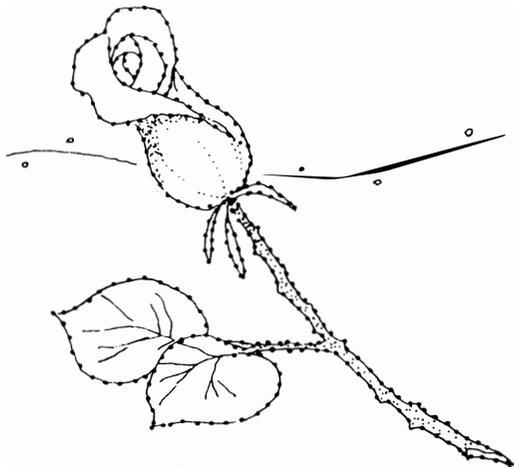
Fairbanks 64° 48N

Anchorage 61° 10N

こんなことがあったので、その後北極廻りの際、充分注意して観測したところ、アンカレッジを出发してからは、はじめから右側北磁極に向い、飛行機の方向と北磁極の至近点は北緯八〇度辺であって、アンカレッジ発後二時間二〇分で、磁針は九〇度右を指した。

そこで、もし磁石を北極に置いたならば、針はどうな

るか。それは、北極からはどちらを向いても南だから、
針は西径一〇〇度、北緯七二度辺にある北磁極に向って
南をさすことだろう。



お話しは少し異なりますが、今冬ルーミアのサラエボでアイススケートの世界選手権大会が開催されました。

日本の黒岩選手は優勝候補にあげられ、彼の出身地である婦恋村も色々取り沙汰されました。それによると日陰の田圃や校庭に水をまいて仮設したリンクで子供達にスケートを奨励し、村中がそれを応援したのでスケーターが続出した。黒岩もその中の一人であるとのこと。

その世界一のスケーターを生んだいわくつきの田圃のスケート場などを見ようと私は婦恋村を訪れてみました。

それはサラエボでの決勝戦が行なわれた二月十日のこと、村のあちこちに「祈優勝黒岩選手」の旗がはためいておりました。見学の帰り同じ群馬の僻地で孤軍奮闘しておられる先輩栃原先生に出来ればお会いしたいと思ひ、タクシ一の運転手に栃原先生のことを尋ねてみました。運転手は私の問いかけに驚きと喜びを込めて答えてくれたのでした。運転手の話によると 『栃原先生は村人の恩人です。一昨年十二月に一年間の闘病生活の後、亡くなりましたが、終戦の年からそれまでの三十八年間、村の医療のために一家を犠牲にし、御自身の全てを村のためにつくして下さった大変立派なお方です。医療だけでなく村全体の文化教育特に体育振興に熱心で

今日の黒岩選手も実は栃原先生が生みの親といってもよい程です。先生の遺徳を賛え残すために昨年十二月診療所敷地内に胸像が建てられました。その時栃原先生を偲ぶという記念誌がつけられました。多分役場にまだ残っていると思いますからこれから御案内しましょう』といわれ役場へ案内されそれを頂くことが出来ました。それはB5版四六頁にわたるもので、先生の家系から始まり、三十八年間にわたる色々の業績と、先生を賛える顕彰事業の数々が述べられています。以下にその概要を述べ、医局の皆様へ御披露申し上げます。

(以下記念誌より抜粋)

戦後、郷土婦恋村が無医村であることから、郷党あげての熱望に答え栃原先生は前田外科病院副院長の夢を捨て、郷土婦恋村に留まり、村営診療所を預かり、僻地医療に専念する一方、衛生的環境づくりに努め、村民の健康を守り続けました。又終戦直後、人心の荒廃が著しい時、地域社会の、特に、青少年の健全育成には体育の外に道なしと信じ、之を唱導して体育協会を創設・更に、スポーツ少年団をも組織し、自ら会長、本部長に推され情熱的にその実践と振興と、明るい村づくりに努力し続けました。その主なものをあげると、地方教育委員

会制度発足以来委員、委員長・教育長として活躍される一方、村内硫黄鉍山地区の小中学校の独立。教育環境の整備。県立婦恋高校の誘致独立。青年学校の開設等々。又、体育の振興には特に力を入れ、婦恋村体育協会、スポーツ少年団を設立し、終世会長として青少年の健全育成と、体力の向上を図り、スピードスケート世界制覇の基礎を築きました。その他、バラギ野外活動センターの誘地。テニス栃原杯、栃原体育賞制度等々数え切れません。(以上)

このように村中を動かした先生のようにでしたが、その目的は全村民の利益に向けられたものであります。全ては村のために時には私財をも投じ卒業して活動し、しかも常に時代の先端を行ったものようであります。そうしてその成果は単に自村内のみに留まらず県下はもとより全国的(婦恋高校の冬期総体優勝)、世界的なレベルに達しているのです。そうしてもうひとつ気をつくことは御自身は教育関係以外の公職には一切つかなかったことであり、数々の業績と共に敬服の他はありませぬ。その結果多くの表彰を受けられました。その中の主なものをあげてみますと、

昭和四十九年 四月 紺綬褒章

昭和五十年十一月 県体育功労者(県知事表彰)

〃 五十二年 十月 体育功労者(文部大臣表彰)

〃 五十五年 一月 僻地医療功労賞(読売新聞)

〃 五十八年 二月 勲五等瑞宝章

などであります。そして最後に近郷近在の有志二五〇〇〇余名の浄財による胸像建立です。先生が活躍された診療所の庭に建てられ側面には五三五文字に及ぶ追慕の誌文が刻まれてあり後世に語り伝えられることでありましよう。(この村営診療所は現在同村出身の群大第一外科、桜井氏によって引き継がれており、万座鹿沢駅近くの三原町中心部にあります)。

私は栃原先生には一面識もなく、この記事も偶然の機会に知り得たものです。同窓生の中にも立派な業績を積み重ねておられる先生方が各地に居られること、思いますが、私がたまたま一時期を過している同じ群馬県内に、かくも偉大な大先輩の居られたことを知り、これも遺徳を偲ぶことゝなるものと思ひ、拙文をかえりみずお伝え申し上げた次第です。

「少年ケニア隊」同行記

鴉 田 征 夫

44

「少年ケニア」。四十代の方なら御記憶の方も多いかと思えます。東アフリカのケニアの地で父と別れ別れになつてしまつた日本少年ワタル、金髪の少女ケイト、長槍の名手、白髪のマサイの老酋長ゼガ、大蛇ダーナ等の登場する山川惣治氏の「少年ケニア」に、私は幼なかつたのか、血沸き肉踊る思いをしたものでした。昭和二十

会など普通の観光コースでは体験出来ないメニューが盛り込まれました。既にTVではNHK六・〇〇こちら情報部で一月三、四、五日の三日間に旅の一部が紹介され、映画封切直前の二月二十六日には、TV東京で一時間番組で放映されました。

六年の頃です。この「少年ケニア」が、かの角川映画として東映を通じてアニメーション化されて、去る三月に公開されました。そこで宣伝上手の角川春樹氏は映画封切前にケニア熱を煽ろうという訳で、作者の山川氏を団長にして、全国より募集した小学五年生から高校三年生までの少年少女二十人を「少年ケニア隊」と銘打ってケニアに送り込みました。勿論角川氏の事ですから、ぬかりなくケニア観光局の特別の許可を得て、ケニア国立公園内での野営、マサイ部落の訪問、そこでの子供達の交歓

この旅行には子供達の他に、角川事務所の人達、TVの撮影隊、東映の製作者、宣伝部の人達、子供達の遊びのリーダー、学研、毎日新聞の記者、日刊スポーツ、中日スポーツ、時事通信等のいわゆる芸能記者等で、一行は私と看護婦を含め四十五人にふくらみました。私には全く偶然に、同行ドクターとして声がかかってきました。私事で恐縮ですが、学生時代には中近東学術調査団としてタンカーを利用してイラン、クエイト、レバノンを夏休を利用して廻ったり、また一年休学して、ソ連、ヨーロッパ、ブラジルをヒッチハイクと船旅で世界一周無銭

旅行など自分の腹を痛めないで旅するのが得技でした。アフリカの地は、少年時代の「少年ケニヤ」、同じく山川氏の「少年王者」の影響を多いに受けて、憧れの地でありながら訪れるチャンスがないままあきらめかけておりました。したがって今回の話は私にとって、まさに「棚からボタモチ」でつい「費用は自分持ちでも行きたいくらいですね。少年ケニヤは暗記する程読みましたよ」と本音をはいて、端目構わず、飛びつくように引き受けてしまいました。旅行期間が、五十八年十二月二十五日から五十九年一月一日と冬休を利用しておりましたので、病院の方は冬休み中の母校の若手ドクターにお願いしました。

出発にあたっては、まさか子供達に少年ケニヤの真似をさせたり、ライオンや象に襲われることはないと思いましたが、必要と思われる診療具、薬品以外に、縫合セット、固定用シーネ等も用意しました。またマラリヤの予防薬も用意して、全員に服用してもらいました。

ナイロビに着くや否や、アフリカ人ドライバーの運転する五台の日本製サファリカーに分乗してケニヤ東部の日本の四国程もあるツアボ国立公園に向け出発。モンパサに向うこの道は、この国の幹線道路ですが、道路の近くに、種々のレイヨ（カモシカ類）、キリン、象など

が出没します。最初のうちは、

レイヨ一頭に興奮して、

皆写真を撮り

まくっております

ました。子供

達はそれぞれ

立派なカメラ

を持っている

のには、今さ

らながら驚か

せられます。

望遠レンズを

つけたカメラの

子供もおり、

さながら「日本少年カメラ

マン部隊」。動物も楽しいですが、はるか地平線までつ

づく大草原（サバンナ）の風景は、アフリカならではの

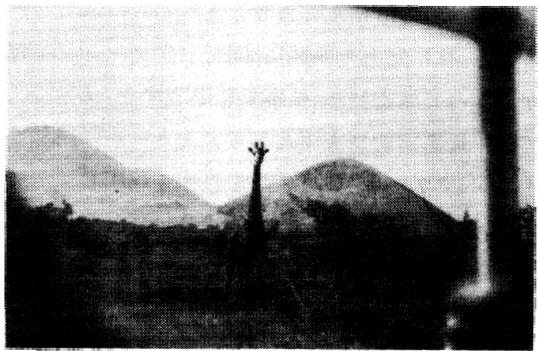
迫力です。赤道のわずかな南寄りですが、国の大部分が高

原地帯のため、気候は真夏の軽井沢の感じ。日が暮れば

セーターが必要。「少年ケニヤ隊」のドライブの様

をTV撮影隊が写しながら三〇〇km近くをおよそ四時間

で走り目的地に到着。

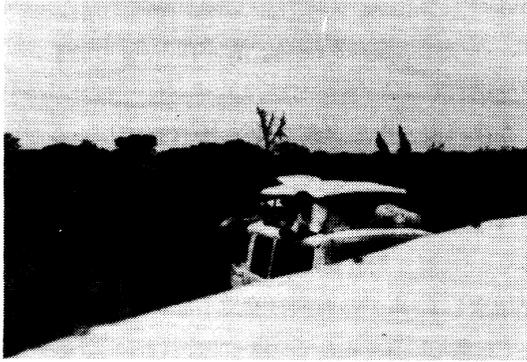


道路近くにあらわれたキリン
サファリカー天蓋より

今夜の宿となるべき「ツアボ・サファリキャンプ」に急ぐ。乾期なのに、いたる所で小川が増水していて車は小川の中をスリップしながら辛じて渡る場面が多くなり、行き先不安になる。案の定、ロッジの前の河が増水して、車での渡河は全く不能。黒人がゴムボートに乗ってきて四人づつ乗ってくれという。かなりの急流なので子供達では万一を考えると危ないということで、まず私を含め四人が先発隊として渡る。濁流を右に左に流されながら対岸にたどりつく。往復に約四〇分。とても四五人渡りきれないので、子供の万一も考えて予定のロッジはあきらめる。四五人分の昼食を用意して待っていたイギリス人の女主人公は「この程度の増水は *no Problem* なのに」と恨めしそうに対岸を眺める。「今度は私が女房、子供達を連れてくるから、勘弁してくれ。限られた時間で仕事をしなくてはならないので」と謝まりの一手。プールはあるし、川の側で美しいロッジなのに実に残念。結局、街道筋にあるツアボインというブーゲンビリアの花一杯の宿に泊る。ここは公園外なので動物が出てくることもない。久し振りに機内食から開放されたので、食堂での食事がひどく待ち遠しい。夕食前に、アフリカの青い空のもと、プールで気分爽快に泳いでいると、突然けたたましい打楽器の音が聞こえてくる。食事の合図

らしいので急いで食堂にしてみると、何のことはない、テーブルの上に皿を数枚伏せて、その上にスプーンを何本ものせ、二人の黒人ウェイターがはげしくテーブルをリズムカルに叩いている。彼等は独特のリズム感で何でも楽器にしてしまう。食事は特に変わった物はなかったが最初に食堂に入って一番奥に入ったら、食事は、運ぶの一番近い入口近くから配膳されてゆき、最後まで待たされたのには閉口する。翌日は入口の近くに席をとる。翌朝西ツアボ国立公園に入る。低い灌木が多く、動物を見つげにくい。まず目にとまるのは勿論、キリン、次いで象。保護政策の為、増えすぎて今は計画的に殺している噂もある。羽田で買ったニコンの十倍の双眼鏡が威力を発揮する。動物の皮膚のしわ、表情までよく見え、時には雌雄の区別まで分ってしまう。十倍だと少々ぶれるので八倍位の方が良いかも知れない。マントヒヒ、レイヨウ、ジャッカ爾等が次々と至近距離に出没し、段々キリン位では誰も見向きもしなくなる。広大な草原を見下す小高い所に来て見渡すと、驚いた事に、地平線まで続くこのサバンナに点々とサファリカーが蟻のように走り廻っている。年末休暇でケニヤの高原も混み合っているらしい。

午後は西ツアボを別れて、アンポセリ国立公園に入る。



サファリカーのすぐ傍を巨象が通る

か手に入れようと、いちの望みに賭けることにする。槍の刃は荒っぽく削つてあるだけ。陸上競技用の槍に比べると二倍近く重い。これではライオンを倒すとすると、余程至近距離に引き付けなければ、如何にマサイと

物売りの中に一人、マサイの槍を持っているのがいた。「少年ケニヤ」の中で老酋長ゼガのあやつる刃渡り五〇cmもあるマサイの長槍を、私は出発前から買いたいと思つておりました。みやげ物といっても、手造りで本物と変らない。戦士の手垢で握りが黒光りしていないだけ。八〇〇シリングというのを交渉して四〇〇シリング（約七〇〇〇円）で買う。勿論、日本の税関で取り上げられることは覚悟の上。再申請して、美術工芸品として何と

いえどもむずかしそう。

アフリカの紹介に必ずといっていい程出てくるキリマンジャロを背景にライオンやキリンがいる写真は、ここアンボセリで撮られたもの。アンボセリは灌木が少なく、視界が良いので動物を容易に見つけられる。早々に十頭位の象の群と遭遇する。驚いたことにサファリカーの運転手君は、象の目の前まで車を進める。象にしてみれば、いわば危険区域内に踏みこまれ、危険を感じて鼻を振り

上げ、耳を広げ咆哮して車を威嚇する。運転手はエンジンをふかして逆に象を威嚇する。乗っている方はスリル万点だが事故はないものかと思ってしまう。象の興奮も覚めやらぬうち、道端の長槍を持ったマサイ土人



ライオンと遭遇。満腹なのか全く動こうとしない。車には無関心。

が、草原の奥にライオンがいると指さす。道のない草原をしばし走ると、二頭の雌ライオンが悠然と休んでいる。車が近付こうとどこ吹く風。腹が一杯らしい。動物通の話によれば、このまま二日も寝ころんでいるだろうとの事。ヤコベツティの「世界残酷物語」ので、観光客がライオンに襲撃されて食いちぎられる場面の真偽はともかくとして、少くとも大人達は、あの場面に脳裏に浮かんだに違いありません。私もその一人。さすがに車から降りて写真を撮ろうという者はなく、車の天蓋を開けて、おとなしくカメラをパチリ、パチリ。

長い道のりも、次々に展開する大草原のドラマに時を忘れ、あっという間に一日が終り、目的地の野営地に着く。テントは二人に一つで大小二〇余りが既に張ってある。日も暮れてきて、今にも猛獣が目を光らせて木陰からあらわれそうな雰囲気。野営地入口には英語で「テント内に食物を残さないで下さい。象やライオンが侵入する恐れあり」の注意書きがある。野営地は草原の中の一角に、木立に囲まれた所にある。その周囲には、それと見えずぐ分る象の足跡がいっぱい。各自、テントに分れ荷物整理した後、食事に集まる。南国の星空を眺めながら、ビールを飲み干し、夕食に舌鼓を打つ。ところが、同行している頭をつるに剃り上げた若い芸能記者一

人の様子がおかしい。

「皆んな、本気なのかよ。こんな恐ろしい所、寝られるか。入口にも書いてあるだろう、ライオンや象が出てくるかも知れないんだ」と半べそをかいている。確かに、一般の旅行客は野営は禁止されている。指定地以外は車から降りることすら禁じられている。今回は、TV撮影ということでケニヤ観光局より特別の許可をとってのキャンプング。四年前からこの場所、動物学者等を対象に野営を許可しているが、一度も事故はないとのことだった。しかしながら、他の記者の中にも、許可はとったとはいえ、子供を含む団体が、こんな危険そうな所にキャンプを張るのは無茶だとの意見もちらほら出はじめました。批判記事を書く恐れもあるので、夜通し焚火をたいて交代で不寝番をつけることにする。実際、動物があらわれても役に立たないことは承知の上で。

この夜頃から、かなりの強行スケジュールの影響もあってか、乗り物酔いばかりでなく、軽い下痢、発熱、腹痛を訴えるものが相次ぎ結構忙しい。中には今日、車が水たまりにはまった時、車から素足で降りて水たまりを歩いてから手掌、足遮に急性皮膚炎をおこしたのを、熱帯の寄生虫にでも入られたかと勘違いして泣き出す女の子も出る仕末。

深夜、一時頃だろうか、遠くでトラックのエンジンをふかすような響きがある。車にしてはおかしいと聞き耳を立てると、やはり猛獣の唸り声。朝になって聞くと、サファリカーのドライバー達は、平気な顔で「このキャンプのまわりは、象の通り道なんだ。子象をつれた親象が神経質になっていて、ライオンが威嚇する。するとライオンが唸るんだ」と言う。どういふ訳か木立ちに囲まれた三〇〇m四方位の野営地は象は避けて通るといふ。同行した看護婦も毎日新聞の女性記者と同じテントに寝たが、テントの廻りを小動物がガガゴソゴソ歩いていて寝つけなかったという。記者女史は、持参したフィルムを前夜の宿に置き忘れた位の呑気な人で、全く気がつかず、「熟睡しましたわ」とケロリ。先のツルツル頭の芸能記者氏は、猛獣の唸り声に泣き出し一睡もしなかった由。しかし、子供達は疲れから熟睡しほとんどが気付かなかつたらしい。団長の山川惣治氏は、「こんな一夜を経験出来るなんて」と興奮気味で、野性味たっぷりのケニヤの夜を楽しんでいる風情。もっとも、象の大群が、テントのすぐ裏五〇m程の所を通った時刻の見張番はさすがに慌てたらしい。

翌朝、記者連、特に芸能記者のグループが例のツルツル頭を先頭に、こんな所に居られるか、宿をかえようと

言い出した。取材される側のつらさ、数人が車で一時間程の最も近いロッジに交渉に行ったものの、休暇の旅行客が満杯でとても無理。その上、昨夜来の雨で道が泥々で、普通のサファリカーでは一寸無理。もう一晚、予定通りにここに泊ることとする。

この日は、子供達は例の二人のリーダーからテントの張り方、木をすり合わせて火をおこす法、そして自分達で食事を作ったり、いわゆるサバイバルの訓練を受けて楽しむ。久し振りに飛行機、車から解放され、やや疲れ気味だった子供達も元氣を取り戻したようだった。しかし、子供達のこういう遊びも常にTVに撮影される訳で、いちいちカメラマンから、どうしろこうしろと注文がつく。すっかり俳優気取りになって調子に乗る子もいる一方、それがストレスになり頭が痛い、腹が痛いと逃避する子も出てきた。テントに入れて休ませるとおさまるが、そのうち小五、中二の女の子二人は、どうしても厭だと、夕方まで遊びに加わらなかつた。急性虫垂炎を疑わせる女の子が出て気をもませたが、月経とわかりホッとするとゲを刺す子、馴れないナタで足に切創をして縫合する男の子まで出て、私達も忙しくなってきた。そうしてる時、ハプニングが起る。五〇頭程の巨象の大群が、テントのすぐ裏を通る。子象もいる。十数頭が先づ通り過ぎ

たので後を追うと、後からまた象があらわれ、慌わててテントの方に戻る。子供達も木に登ったり、テントの陰から息を呑んで見守る。カメラマン魂というのか、スチールカメラマンの遠藤氏は、象の群に10m近くまで近寄る。するとボス格の巨象が耳を広げ、鼻を振り上げて咆哮して威嚇する。真正面から撮影するや否や、身をひるがえして逃げ出す。五十才余の彼は、年のせいも、慌わてたのか腰が抜けてよろける。象が追って来なかったのが幸いでしたが見てる方はスリル満点。被写体に一歩でも近附くことが良い写真のコツで、それが出来ない人は一流カメラマンではないそうです。ともあれ、何のさえ



テント場のすぐ裏に巨象が接近

ぎる物のない草原で、真近を通る巨象の大群は筆舌に尽くし難い迫力。一度見てもらわないと分りません。

午後から、近くのマサイ部落の若者二人と十人程の子供達を招待して、子供達は一緒に遊ぶ。言葉はスワ

ヒリ語で、日本人通訳がする。推もが覚えた言葉は「ジャンボ」、「ハワイの「アロハ」に相当する。ジャンボジェット、ジャンボ尾崎のジャンボとは一寸ニュアンスが違う。おはよう、今日はといったあいさつの言葉。マサイの子の踊りは、素朴な歌に合わせて、ただ跳びはねるだけ。ただ腹の底からしぼり出すような若者のかけ声は動物的な響きを感じる。長いロープを使っての縄飛びをマサイの子供に教えるが仲々うまくいかない。特別凄い運



テント場の裏を通り過ぎて行く象の群

動神経を持ってゐる訳でもないらしい。日本の子供は何か一緒に遊ぼうとするが、やはり言葉が全く通じないし、遊び方も全く違う両者は、最後まで噛み合わなかったようだ。ただマサイの子供達は、目が大きくキラキラしており、実に相そうがいいのに感激して、その日の日記に、「私は黒人の男の人と結婚して、黒い子供を産みたい」という日記を書いた女の子がいて、大人達をびっくりさせました。夜はまた焚火をたいて、南十字星を仰ぎながら酒をくみかわし、キャンプ最後の夜をじっくり堪能する。

朝早く、テントを徹収してキャンプ地を後にする。雄大なキリマンジャロを眺めつつ、アンボセリ公園を出てタンザニアとの国境沿いの高原を三時間程、猛烈なスピードで走り抜ける。午前十一時頃、国道からさらに十分程、細い道を車で入った所の、とあるマサイ部落に入る。あらかじめ許可をとってあり、塩、砂糖、毛布など実用品を提供して、かわりに撮影を自由にさせてもらう約束になっている。ちなみに、この黒人達は写真を非常に嫌う。写真に姿を写されると心まで吸いとられると信じられているからで、いわゆる観光マサイ以外はカメラを向けると本能的に身を隠す者が多い。

部落の入口の広場で老酋長夫妻、長槍を持った若衆、



マサイの男衆と子供達。正チャン帽は酋長。長槍に注目を。

牧童風の牛追いの長い杖を持った男達、着飾った女性達、多数の子供達、およそ総勢三十人程のマサイが迎えてくれる。全部一家族と聞いて驚ろく。住居は、灌木で作った垣根の囲いの中に、牛糞と泥をこね合わせて作った

低くて丸っこい家が五、六軒、隣接して並んでいる。プライドの高いマサイの男は極めて無愛想で、決して笑顔を見せない。穂先の極端に長いマサイ独特の長槍や、牛追いの長い杖を持った男達は、いずれも一八〇cm近い長身で、四肢が長く、姿勢が良く、申し合わせたように同じような速さで、悠然と大股で、音も立てずに歩く。時に大きな光る目で鋭い視線を送ってくる姿は精悍そのもの。彼等は、道で車が通っても、立ち止まったり、歩調

を変えたりするどころか、こちらに視線を向けることも少ない。それにひきかえ、女、子供は実に愛想が良く、車が通れば、十人が十人必ず手を振り笑顔を向ける。いたずらっぽく愛くるしい男の子達は、いつこの精悍なマサイに変身するのだろうか、成人式を境に急に変わるのだろうか不思議でならない。

マサイの男の一人が、ドクターはいないかと通訳と一緒にやってきて、手を差し出す。手背は真黒だが、手掌は白い。中指の基部にトゲを刺したが傷が治らないという。傷口から少量の膿の排出があり、手掌中央から末節基部まで腫脹している。化膿性腱鞘炎だ。ここに滞在する訳ではないので外科的処置は無理なので抗性剤を与え、ることしか出来なかった。海外派遣青年隊の経験では、日本人と同じ投与量にすると、近代的な薬など飲んだこともない彼等はかえって副作用で苦しむことが多々あるから気をつけて下さいとの、現地在住の通訳の話だったので、服用の仕方、副作用らしき症状が出た時にはすぐ中止することなど充分に注意して、第一世代のセフェム系抗生物質を手渡す。十分な治療を施すことも出来ず、何とも後味の悪い思いをする。

子供達はマサイの子供達に、めいめい用意した贈り物を手渡して交歓会が始まる。一緒に遊ぼうとするが、一

方は余りにも都会的な子供達、一方は顔に何匹ハエがたかるうと一向にお構いなしの野性的な子供達、一時間やそこらでなじみようがなかった。

異例の事だが、垣根の囲いの中の部落に入れてもらうという貴重な経験も出来た。入口を入ると牛舎のあの牛糞の臭いが鼻を刺す。家そのものが牛糞と泥で出来ているうえ、それらをつなぐ道といわず庭といわず牛糞だらけ。小学校時代、田舎育ちの私は、なつかしい感じがしないでもなかったが、都会っ子はたまらなかつたらしい。帰り際には我慢しきれず、青くなつて嘔吐をもよおす者が続出する始末。私は、家の入口に立っていたマサイのおばさんに無理矢理頼んで家の中に入れてもらう。



マサイの女達。後に見えるのはマサイ族の家。

入口の陰に何と、表には顔を見せなかつた妙令の肌のつややかな可愛い娘がいる。中に入ると小さな明り取りの穴はあるが、真暗で目が馴れるのに数分かかる。内部は十畳間程の広さで中央に炉があり、周囲に三つ程、しきりがあって区切られている。手真似で聞くと、寝る所は一番奥らしい。それ以上の話は通じようがなかった。外は臭いの、家の内部は火で乾燥されているせいか臭気は感じない。しかし何故、この空気がきれいで、軽井沢を思わせるすがすがしい高原に、自分の住居をことさら臭い牛の糞を利用するのだろうか。帰りの車の中で、あれこれ意見が出たが結局、野獣などの外敵から身を守るためだろうという意見が強かった。

マサイの強烈な印象と、猛烈な臭気を身体にしみこませて車に乗り、約五時間、時速一〇〇km近いスピードで草原を走ってナイロビのヒルトンホテルに帰る。一流ホテルの絨緞のロビーを、今しがたまでいた原始マサイ部落の牛糞の上を歩いた靴で歩くのは、誠に申し訳ない気がしたが、何かケニヤの両極端を同時に体験しているように何とも妙な気分だった。

その晩は、ケニヤ観光局主催のパーティが、ナイロビ最高のレストランであるという。本当かいなと思ってい

たが、案の定、日本でTVに流すフィルムを作る為、こちらで企画してケニヤ観光大臣に御出席を願った訳。つまり、観光大臣をフィルムに入れてTV番組に箔をつけようとした。ところが敵もさる者。大きなレストランの半分程を借り切り、TV撮影の準備をして席について、大臣殿を待っても現れない。やっと現れたと思ったらこちらの席を見て見ぬ振りをして、すみのテーブルで何やらヒソヒソ、やがて、日本の撮影隊、製作者と通訳を介して何事か長々と相談していたが、意外な事に日本の撮影隊が引っ込み、アフリカのTV局が現れた。ケニヤ観光大臣は日本の子供達とニコヤカに話しを交わし、その日誕生日の大阪の三浦君を祝福し、最後にケニヤッタ大統領に乾杯とやってしまった。つまり大臣氏は、何故日本のTV製作のお先棒をかつがなくてはならないのかと駄々をこねて協力を断ったどころか、自分の国内向け宣伝に逆利用してしまったのです。日本側の完敗。ともあれ、砂糖をまぶしたチキンとか、珍味もありましたが、久し振りの御馳走を堪能しました。

成田の税関では、やはりマサイの槍は、銃剣に相当するとして国内への持ち込みはなりませんでした。六ヶ月以内にアラスカにでもスキーに行き、その時、槍を税関で受け取りスキーケースに入れて素知らぬ顔で国内持込

みをはかろうなどと、不埒な考えを抱いてますが、今のところ実現しそうにありません。

映画「少年ケニヤ」は、そんないきさつもあって、妻と二人で観に行きましたが、実にきれいな映画で、最近のアニメ技術に驚くとともに、およそ一時間半、童心にかえって、楽しいひとときを過ごしました。

(いわき市医師会)



慶大整形レジデント 制について

若野 紘 一 47

この度、図らずも講師を拝命し、この機会に「抱負を語れ」との編集子の命に、日頃感じているレジデント制についての抱負を記し、お茶を濁したい。

最近の医師過剰傾向と認定医制度の発足により、我が慶大整形のレジデント制も多少の手直しの必要がある様である。多くの関連病院の人的供給と大学中心のレジデント教育の両立の困難性は十分に承知の上で、敢て問題点を提起してみたい。

(1) レジデントの採用法について

我が慶大整形は岩原先生以来の「来る者は拒ず」の伝統の上に、近年は某助教授の「人は石垣」論の下に広く内外に門戸を開放している。このため慶大整形レジデント石垣も玉石混淆となることは止むを得ない。

近年、世上を震撼させたC大の事件を引くまでもなく

「蟻の一穴より堤防が決壊する」の危惧は杞憂であるとは言いつれない。各医大に案内し広く天下の才を募る事は当然であるが、選抜方法を嚴重にする事が必要である。(自分を柵に上げ、他に厳しいは世の常である。)

(2) フレッシュマン教育期間の充実。

この期間に整形外科医としての基本姿勢が形成される様であり、一年間を通じての教育は必要であるとともに、入室した者の権利でもある。途中で人事の穴埋め的に出張をさせない事は勿論、状況によっては、この期間での四ヶ月間の麻酔科訓練を他の機会に譲る。麻酔習得の必要性を軽んずるものではないが、近年は麻酔科の存在しない病院は稀となったことでもあり、出張時にもその機会はある。只し、この期間にあってはお兄様方による濃厚クルズス漬けは当然であり、「慶応で何を習って来た？」の言葉を駆逐する。(もっとも、フレマンは早く出張したがるが)

(3) ローターションのレジデント

小生の見聞した米国でのレジデントは懸命に勉強一途であり、被教育期間であるからには、経済面での犠牲はやむを得ないと割り切っていた。

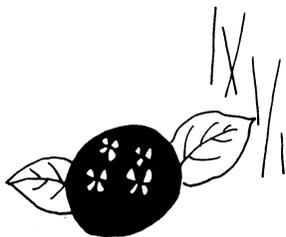
敢て提言すれば、教室の方針として、出張中のレジデントは原則として、パートを禁止する。更に、可能な限

り水曜日は教室のカンファレンスに参加出来るように、スケジュールの調整を各医長にお願いする。(昔はそのような配慮がなされていたと聞くが)

(4) レジデントへの試験と出張決定法

現行のフレッシュマン独立試験と専修医採用試験を厳格化し、その期間中の医師としての勤務評定を加味し、出張人事は教室の責任でこれを決定し、「くじ引き」は一切廃止する。また状況によっては採用中止(世間でいうクビ)や出張差し止めの処置も行う。

以上、思いつくまま感想とも提言ともつかない事を挙げたが、いずれ日本のレジデント制も、この様にならざるを得ない。レジデントにとって些か苛酷のようではあるが、かくあってこそ、慶大整形レジデント終了の肩書きに重みが出るのであり、手にする花も大きくなるものと信ずる。(こんなことは、一般社会のプロ集団ではあたりまえの事なのだ)



新人紹介

昭和五十八年五月入局



▼ 赤坂 嘉久

出身校：慶応義塾普通部より高校、大学医学部。

スポーツ：大学ではボートを漕いでおりましたが、その

体格で？とよく言われます。現在、スキー、テニス、

ゴルフ、ウィンドサーフィンの四つ中心。

趣味：バイオリン。医学部管弦楽団に所属しております。

した。今でも暇を見つけては弾いていて、隣に住ん

でいる先生に迷惑をかけています。

入局の動機：手術及びスポーツ医学に興味があったからが、本根は、渡辺淳一の本を読んで感動したからです。

入局後の感想：現在、この道を選んで本当によかったと思っております。手術の面白さ及び整形外科の奥行きを深さを知って、もっと勉強しなくてはと思いつつ、遊びの誘惑に負けてしまう毎日です。諸先生方に御迷惑をかけた事もありましたが、これからも御指導の程よろしくお願い致します。



▼ 河野 亨

生年月日：昭和三十三年九月二日

出身高：東京教育大学附属高校

趣味：ウインドサーフィン、スキー

特技：卓球、スペイン語を少々

入局の動機：整形外科は何といっても守備範囲の広い領域であるし、これからますます発展する分野でやりがいがあると考えました。また、かねてより外科系志望だったこともあって入局と決めました。

現況：入局後、はやくも一年がすぎ、現在は神奈川県済生会で外傷の症例を中心に、毎日目まぐるしい日々を送っています。まだ失敗をすることも多く、他の先生方に迷惑をかけることもたびたびですが、めげることなく元気にやっております。
先輩方、今後とも御指導、御鞭撻の程よろしくお願い致します。



▼ 石橋 昌 則

出身校：武蔵高校 弘前大学

趣味：学生時代は、ラグビー、テニス

入局の動機：友人の紹介

現在の心境：慶応整形に入局し、本当によかったと思っております。毎日が新しい事の連続です。諸先輩方の教えに従い、整形外科の基本を学ぼうと励んでいます。皆様、今後とも宜しくお願いいたします。



▼ 近藤 敦

生年月日：昭和二十九年十二月三十日

出身校：岩手医科大学医学部

趣味：①デインギー：風と波だけしか考えず、海の上

を滑っている時が最高です。

②うまい食べ物と酒・心地良い音楽

入局の動機：メスを持ちたかったが、あまり細かい事は性に合わず、また、内臓の様に手答えのない柔らかい物は嫌いであった。しかし入局して、整形外科に対する私の考えは正しくなかった事に気付く。

入局後の感想：稲田登戸病院で研修させていただいておられます。慶応での一年間のフレッシュマン生活も含めて、各班とも充実したスタッフがそろい、幅広く、かつ深く学べる事、また厳しく、ある時はやさしく御指導下さることを感謝しております。

▼ 近藤 信和

生年月日：昭和二十六年十月三日

出身校：東京医科大学

趣味：スキー、テニス、アイスホッケー、ゴルフ

特技：早寝、遅起、スポーツ

入局の動機：形成外科の研修として整形外科に入局し、都立大久保病院に出張し、整形外科の居こちのよさのためそのまま転科してしまいました。

入局後の感想：おなじ外科系に転科したのですが、よき諸先輩に恵まれても楽しく感じています。同期の中では最年長ですが、気は若いつもりですのでよろしくおねがい致します。



▼ 崔 文 錫

生年月日：昭和二十七年十月二十八日生 三十二才

出身校：韓国ソウル大学医学部出身

S五十八年五月一日入局

趣味：音楽、スポーツ

入局の動機：①知人の紹介

②優秀なスタッフの下で研修したかった。

入局後の感想：S五十八年五月より大病院でフレッシュ

マンとしてスタートしたわけですが、初めは知らない

先生ばかりで、自分が他のフレッシュマンや諸先

生方にうまくとけ込めるかとても不安でした。それ

は自分が外国人であり、外部からの医局員であった

からです。

しかし、日が経つにつれ、その様な不安は取り除か



▼ 千 葉 一 裕

生年月日：昭和三十三年十一月十日 二十五才

出身校：慶応義塾大学医学部卒（六二回）

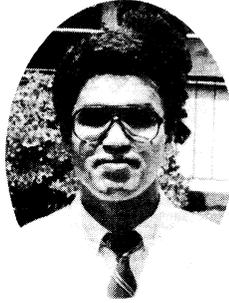
趣味：頭を使わず体を動かす事

れ、どの先生方も人間的にすばらしく、又分け隔てなく教育して下さりとても満足のいく充実した大病院の生活を受けることが出来たと思います。現在、横浜警友病院に勤務中ですが、ここでも同じ様なことが言えると思います。

この先何回か出張病院が替わると思いますが、各病院の先生方の期待に応えられる様になんげりたいと思います。

特技：宴会での上品な芸

近況：浦和市立病院にて福岡先生に鍛えられた後、現在埼玉中央病院にて石下部長の元、日夜仕事に勉強にそして酒にも励んでおります。そろそろ肉体労働者より、文化人に脱皮したいと考えています。最近ゴルフをはじめましたので、諸先輩方には是非教えて頂きたいと思っております。



▼ 野々宮 廣 章

昨年三十一年五月十八日、徳島県に生まれる。母親のお腹の中から阿波踊りはじめて、二十余年、年に一度は阿波踊を踊らないと気がつかない人間となってしまった。学生時代は、医学生らしくないと言われ、医者になっ

た現在も、医者というより大工と言った方が納得される

体力と腕力には自身があります。『初心忘るべからず』の言葉を座右の銘に頑張っていると思っております。諸先生方、宜しく御指導の程、お願い申し上げます。



▼ 平 石 英 一

昭和三十一年十二月九日（日曜）生まれの二十七歳です。慶応大出身（六十二回生）です。中学時代よりサッカーを十四年していました。趣味としては、サッカー以外に、スキー、麻雀を少々、最近は、ゴルフ、テニスをはじめました。特技としてはこれといったものはありません。入局の動機は、諸先生方のエネルギーな活躍振りに魅了され、又、全年齢層の人々に対峙し、メスを執

れるからです。現在は最初の出張先の静岡日赤でない頭を振り絞り、無器用な手を動かしています。今後とも、御指導、御鞭撻の程、宜しくお願い致します。



▼ 宮田 義之

生年月日：昭和三十三年四月二十八日

出生地：大阪（生後半年のみ）

その後は神奈川・東京で育つ。

出身校：普通部より 慶応路線

趣味：歩かないですむスポーツ

むずかしくないかけごと

嫌いなもの：日本語以外のことば

とにかく、どうにもならない人間ですが、諸先生方の

御指導のもと、どうにかりっぱな医師になりたいと思います。心より、よろしくお願い致します。



▼ 森本 隆雄

昭和三十一年二月十四日生まれ。大阪府立天王寺高校

出身。私は最初皮膚科に入局しましたが、昭和五十八年

五月一日付で整形外科に転科させていただきました。整形

形入局以来、はやいもので一年半以上たちましたが、や

っと「皮フ医者」から「ホネとスジの医者」に脱皮でき

た、という感じです。整形の先生方は一見豪放磊落なよ

うに見えて、その実大変な勉強家の方ばかりで、すばら

しい科に入れてもらったと思っっています。皮膚科のよう

なつぶしのきかない科に一年間もぶらぶらしていた私を

快く受け入れてくださった整形スタッフの先生方に、心から感謝しております。

私は無趣味な人間ですが、ただ一つモダンジャズが三度のメシより好きです。好きなアーティストは、Al Haig, Bill Evans, Hank Jones, Miles Davis, Ted Curson, Eric Dolphy, Sonny Criss, Wayne Shorter, Zoot Sims, Curtis Fuller, Kenny Burrell, Roy Haynes 等々です。同好の士おられましたら、隠れた垂涎盤など教えて下さい。



▼ 吉 田 篤

生年月日：昭和三十三年十二月十六日

出身校：学芸大附属高↓山形大学医学部

本年五月より東歯大市川病院にて研修させていただき、学問はもとよりゴルフのスイングに至るまで、いろいろと暖かい御指導のもと有意義な毎日を送っております。整形外科には学生時代、スキー部に所属していた関係で骨折等身近に感じてきた事もあり入局しましたが、いざ始めてみるとその奥の深さに感動しとまどうばかりです。こちらに来て外来等始め、勉強の足りなさをしみじみ感じました。知識のなさは顔には出さず？ハートで補う様心がけているつもりですが……

医者になって一年と少し、最近精神面で問題のある患者に関し、病気を治すのでなく患者を治せと教えられ、医師としての責任を痛感。新たなる気持で努力しようとする今日今頃です。最後に今後ともよろしく御指導の程お願いいたします。



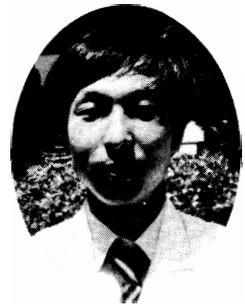
▼ 吉 田 宏

出身高校：和歌山県立桐蔭高校

出身大学：慶応大学

趣味：モータースポーツ

私の趣味から車の運転だけを思いうかべる人が多いと思いますが、そこがプライベートの悲しさあるいは楽しみかも知れませんが、ある程度車をいじれば競技の参加は不可能なのです。これも私が整形外科医局に入局した一つの動機かも知れません。至らないことも多いとは思いますが、よろしくお願ひします。



▼ 出 江 紳 一

生年月日：昭和三十三年二月十七日生

出身校：慶応大学医学部卒（昭和五十八年三月）

独身

特技・趣味：特にありません。余暇は、テニスをしたり、プールに行ったりしています。この夏、飛び込みを始めました。
入局の動機：（リハビリ）、体力、睡眠、食事、仕事、全ての面から健康について研究したいというのが、今の気持ですが、入局の時は、何となく、です。
入局後、楽しいです。



▼ 森 英二

入局して、はや二年が過ぎようとしておりますが、リハビリ科のローテーションの関係で、整形外科、内科、リハビリ科を四か月毎に勉強してまいりました。科によって、考え方が随分違うと実感しましたが、生きるということは、どういうことなのかという原点に立ち返りながら、今後の自分の仕事を考えていきたいと思っております。

学生時代にアイスホッケーやラグビーで鍛えた肉体も、最近では運動不足のために、やせおとろえてきてしまいました。趣味のスポーツや、自転車通勤で、鍛えなおし、医療や雑用の毎日を乗り切っていきたいものです。

昭和五十九年五月入局



昭和五十九年五月入局

▼ 猪飼 俊隆

生年月日：昭和三十三年九月八日

出身大学：東京医科大学

趣味：ゴルフ、テニス

入局の動機：関連病院が多く、教育面もしっかりしているから。

入局後の感想：病棟、外来ともに大変忙しいが、とても明るい科です。何といっても医者や看護婦よりも元気な患者さんが少なからずいるのですから。



▼ 井上 邦 夫

生年月日：昭和三十四年二月二日生 二十五才

出身校：滋賀医科大学

趣 味：テニス、ゴルフ、水泳

入局の動機：普通部、塾高と過ごしたので、是非最後に

来たかった整形は分野が広く、また、スポーツ医学

にも少し興味があったので整形を選んだ。

入局後の感想：スタッフに恵まれ、しっかり勉強できる。



▼ 江口 弘 芳

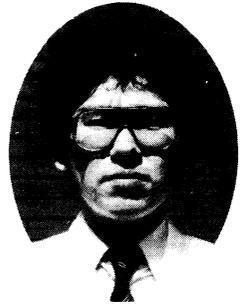
生年月日：昭和三十三年十月二十四日

出身校：慶応大学

趣 味：スキー、テニス、映画

入局の動機：外傷に興味をもった為

入局後の感想：まさに僕にぴったりの科であると思う。



▼ 大熊 一成

生年月日：昭和三十五年一月十五日

出身校：北里大学

趣味：テニス

入局の動機：伝統があり、巾広い症例を体験する事ができると思ったため

入局後の感想：毎日諸先生方にしごかれ、きつい日々を送っています。近頃は少し余裕もでき、興味をもって勉強することができるようになりました。



▼ 木佐木 啓史

生年月日：昭和二十五年七月六日 鹿児島生れ

出身校：慶応義塾大学政経学部卒後、聖マリアンナ医大

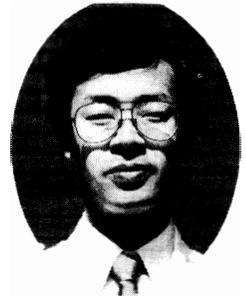
卒、昭和大学藤ヶ丘病院麻酔科を経て、慶応大学整形

形外科教室入局

趣味：バックギャモン

スポーツ：テニス、ゴルフ、水泳（最近スキューバダイビングを始める）、スキー、車（国際B級ライセンス取得）、柔道（三段）

現在、ダイエット中（一八四cm、一〇五kg）です。体力だけが取り得ですが、精一杯頑張ろうと思えます。よろしくお願いします。



▼ 高橋 正明

生年月日：昭和三十二年三月四日

出身校：慶応大学

趣味：スキー、テニス、映画鑑賞

入局の動機

- ① ポリクリで受けた明るい医局の雰囲気
 - ② 同学年で整形を志さず楽しい仲間
 - ③ 充実したスタッフ
 - ④ 他科に比べて明るい患者
- 入局後の感想

- ① アカデミックで大変面白い
- ② “類は友を呼ぶ” 他校からの明るい仲間
- ③ やはり充実しています。
- ④ 明るく楽しい病棟です



▼ 仲尾 保志

生年月日：昭和三十三年十月一日生 二十五才

出身校：慶応義塾大学医学部

趣味：スキューバダイビング 水中写真撮影

入局の動機：自分は以前より外科系に進みたく思っていました、ひと言に外科系といっても、現在ずいぶん細分化されております。自分が、その中で何にむいているのか、今の段階ではわからず、そういう意味で整形外科の様に単一の科でありながら、spine、

しかし、入局後一ヶ月しか整形でお世話になってから戻って来た時に感想が変わるかもしれません。宜しく。

knice, hip, had tumor etc.多岐にわたり、以降四年ないし五年、医師として仕事をした上で、自分の専門を決めることができるということは、すばらしいと思ひまして入局させていただきました。

入局後の感想：まだわずか、入局後五ヶ月で、ろくに仕事も覚えていないような段階ですが、先生方はたいへん御親切に御指導下さるので、少しでも早く、仕事を覚え、またあらゆるチャンスにチャレンジしていくつもりです。



▼ 西 幸 美

生年月日：昭和三十四年十月十九日
出身校：昭和大学

趣 味：スポーツ全般

入局の動機：外傷に興味があった為
入局後の感想：まさに僕にぴったりの科である。



▼ 西 村 正 智

卒業して、入局してから早くも一年間が過ぎてしまいました。五月、六月と六一三で鍛えられ、七月、八月、九月と横浜南部済生会で実戦面で鍛えていただきました。現在は麻酔科を回っていますが、もうすぐフレマン出張にです。

大学六年間は、その大半をクラブに注ぎました。一年から五年までは水泳部で水の中、四年後半から六年後半まで陸上部で長距離をやりました。このため心臓は両室

肥大をおこしているようで、知能レベルも考慮されて、
あいつは両棲類ではないかと言われてました。

入局して一年ですが、整形外科は自分に非常にあって
いると思っております。今後、なお、一層努力しますの
で、よろしくご指導お願い致します。



▼ 橋 本 健 史

生年月日：昭和三十四年四月二十五日

出身高校：千葉東高校

大学：慶応義塾大学医学部

クラブ：三四会弓道部

趣 味：テニス、スキー、ゴルフ、ドライブ、カラオケ
整形外科学教室に入局させて頂いて九ヶ月が過ぎま

した。その間、多くの諸先生方に御世話になりました。
て本当にありがとうございます。特に夏の三ヶ月
間の小田原市立病院での研修は忘れられないものと
なりました。

高校時代勉強した反動で、大学は遊んでしまいました
たが、今度はその反動で研修は一所懸命にやろうと
思います。宜しくお願いいたします。



▼ 松 村 崇 史

生年月日：昭和三十四年九月十八日

出身校：東北大

趣 味：スキー、スウィミング、ゴルフ、読書

入局の動機：活気のある大学だから
入局後の感想：充実した毎日です。



▼ 桃原茂樹

生年月日：昭和三十五年一月十八日

出身大学：慶応義塾大学（六十三回生）

趣味：読書（勉強含む）映画鑑賞、カラオケで回りの人をシラケさす？

性格：穏やかで親切、真面目の一言。（但し、アルコール入るとやや難あり。）

入局の動機：これからの医学は「Team」の時代で、特に人工臓器が主体となる治療が行われると思う、人工関節などすでに実用化されている整形外科に入局し、色々臨床に接して勉強、研究したかった為。

入局後の感想：慶応の麻酔科をローテーションして、他の科の実態を見るにつけ、自分の選択が正しかったと確信せざるを得ない毎日です。



▼ 山下方也

生年月日：昭和三十五年二月二十四日

出身校：慶応大学

趣味：テニス、スキー、映画鑑賞

入局の動機：外科系で、教室が明るくて、将来性がある、優秀な先生達のそろっている科。整形外科だと思っただから。

入局後の感想：やさしい先生方、楽しい仲間、明るい病棟と三拍子そろったすばらしいところだと思います。先輩方にまけないりっぱな整形外科医になれるようがんばりたいと思います。



▼和田 信 裕

生年月日：昭和二十七年十一月二十九日

出身校：名古屋保健衛生大学

趣味：ラグビー（これしかない）

入局の動機：学生時代さんざんラグビーでケガをして何

度も整形にお世話になりました。

入局後の他大学より入局したということ、最初はだい

ぶ慣れるのに時間がかかりました。最近は厳しい中

にも楽しく勉強しています。



▼高 橋 守 正

生年月日：昭和三十三年十二月二十日

出身校：慶応義塾大学

入局の動機：自転車で山野を駆けめぐることと、オート

バイで大きくバンクさせつつコーナーを曲がり切る

こと、そしてその結果として心が虚となることが私

の趣味である。温泉で衷心から弛緩して酒を飲する

ことも又楽しからずや!!

入局した動機：手術による時間の拘束がないIV手術の楽

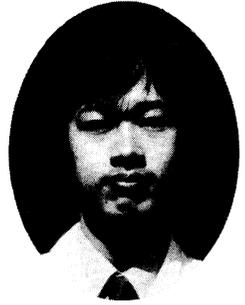
しさ

入局後の感想：リハのことは何も知らない今、上記不等

号は、やや \rightarrow に変化しつつあるようだ。

雑記：スマイルはスマイルたり得ることが最高であり、他

の何物でもないのだと思う。



▼ 花 山 耕 三

生年月日：昭和三十四年四月七日

出身校：慶応大学

趣味：サッカーなどで、地面を這いまわること。やはり僕は土の上が好きです。

入局の動機：患者さんが死ぬことはあまりないと思ったので。

入局後の感想：自分の腕力の無さを痛感しています。もっと腕力を鍛えておけばよかったと思います。

— 教室だより —

朝妻孝仁君
高山真一郎君

こども福祉医療センター
川崎市立病院

△新医長▽

丸山徹雄君 練馬総合病院 昭和五十九年六月
水島斌雄君 稲田登戸病院 昭和六十年一月

△フレッシュマン人事▽

赤坂嘉久君 済生会横浜南部病院
石橋昌則君 小田原市立病院
河野亨君 浜松赤十字病院
近藤敦君 稲田登戸病院
近藤信和君 平塚市民病院
崔文錫君 警友病院
千葉一裕君 埼玉中央病院
野々宮広章君 静岡赤十字病院
平石英一君 伊勢慶応病院
宮田義之君 足利赤十字病院
森本隆雄君 芳賀赤十字病院
吉田篤君 東京歯科大市川病院
吉田宏君 川崎市立病院
井上邦夫君 魚沼病院
木佐木啓史君 太田病院
江口弘芳君 済生会神奈川県病院
仲尾保志君 済生会宇津宮病院

△五十九年度インストラクター人事▽

丸谷真君 浦和市立病院
中井定明君 国立村山療養所
石倉哲雄君 慶応婦局
吹本武憲君 浜松療護園
松本昇君 国立小児病院
添田修一君 月ガ瀬リハビリテーションセンター
高田知明君 専売病院
湯沢喜志雄君 太田病院
飯島謹之助君 日野市立病院
高畑武司君 稲城市立病院
塚原茂君 国立村山療養所
木村記行君 済生会宇都宮病院

西 幸美君

福生病院

西村 正智君

伊勢原協同病院

橋本 健史君

浦和市立病院

山下 方也君

立川共済病院

〈留学〉

西山 和男君

アメリカ アイオワ大学

齐藤 聖二君

アメリカ ルークスメディカルセンター

山岸 正明君

オーストラリア マーシー
プライベート病院

松本 秀男君

イギリス リーズ大学

〈帰国〉

吉峰 史博君

イギリス

井上 慶三君

アメリカ

木村 彰男君

アメリカ

中井 定明君

ドイツ

泉田 良一君

スイス

*新専任講師

若野 紘一君

昭和五十九年十月

竹田 毅君

昭和五十九年十月

○御結婚

慶弔のお知らせ

58年3月

5月

6月

10月

12月

59年3月

4月

5月

6月

11月

星野 達君

三枝 憲成君

白石 建君

川久保 誠君

塚原 健司君

米山 芳夫君

刃持 和彦君

柳田 雅明君

手塚 正樹君

金子 修君

外川 宗義君

飛騨 進君

松本 秀男君

塚原 秀茂君

森 英二君

西 幸美君

柳本 繁君

○御逝去

	9月	5月			59年4月	9月	8月		7月	6月		3月	58年2月	12月	57年11月		12月	59年11月	
古川省三君御尊父	阿久津寿一君御母堂	岡田菊三君御尊父	岩田清二君御母堂	野村栄貴君御母堂	新井田覚太郎君	山内吉雄君	上石英明君御尊父	近藤敦君御尊父	大平民生君御尊父	森田勝君御母堂	河野道隆君御母堂	道山新一君御令室	畠中卓正君御尊父	樋口正隆君御尊父	栃原潤君	昆野三平君御尊父	齐藤正史君	鶴飼茂君	山田治基君

○御開業

	10月				59年1月	9月	6月	4月	3月	58年2月		12月	11月	10月				
多田実君	井上慶三君	広本明敏君	坪山寿郎君	市川慎介君	家田浩夫君	川村碩彬君	中山喬司君	青木善昭君	小池昭洋君	野末洋君		米谷晴夫君	中邨裕一君御子息	新井武憲君御母堂	吹本憲仁君御尊父	市原真仁君御尊父	仲川富雄君	齐藤正也君御尊父

整形外科外来診療

昭和六十年二月現在、外来は次の担当医により行なっております。

◎ 一般外来 (受付午前八時四十分～十一時)

月：泉田 重雄 教授

若野 紘一 (脊椎・脊椎)

火：内西 兼一郎 (手・肘)

坂巻 豊教 (小児・股関節)

小川 清久 (肩関節)

水：平林 冽 (脊椎・脊椎)

富士川 恭輔 (膝・リウマチ)

矢部 啓夫 (腫瘍)

木：竹田 毅 (膝・リウマチ)

堀内 行雄 (手・肘)

石倉 哲雄 (小児・股関節)

金：伊勢亀 富士朗 (膝・リウマチ)

里見 和彦 (脊椎・脊椎)

藤中 星児 (小児・股関節)

土：花岡 英弥 (腫瘍)

伊藤 恵康 (手・肘)

◎ 特殊外来 (受付午後〇時三〇分～二時)

月：脊椎 | 平林、若野

関節 | 富士川、竹田

スポーツ | 伊藤、若野、竹田

木：手 | 内西、伊藤、堀内

小児・股・足 | 坂巻、藤中

金：腫瘍 | 花岡、矢部

側彎 | 土方、鈴木

追記

六十年三月三日青山にて長女和歌子さんと帝京大泌尿器科医師との華燭の典が開かれました。池田先生は残念ながら出席されませんでした。病床でとてもお喜びであったことと存じます。

また三月末には、お家族の皆様のご遷居へのお引越がありました。お子様方の御成長とともに、少しでも先生の近くに居を構えたいという奥様の御希望であったとうかがいました。

新住所

神奈川県藤沢市辻堂大平台一―十三―二二

電話 ○四六六(三六)二一四五

(文責 内西)

☆同窓会役員の変更

昭和五十九年十二月十五日の同窓会幹事会において役員の変更の件左記の通り承認されました。

同窓会会長

旧 伊藤 原 新 大内 正夫

幹事長

旧 宮本 銈造 新 小川 正三

幹事

田中 一雄 石名田洋一

高橋 昭 伊藤 恵康

森 雅文 竹田 毅

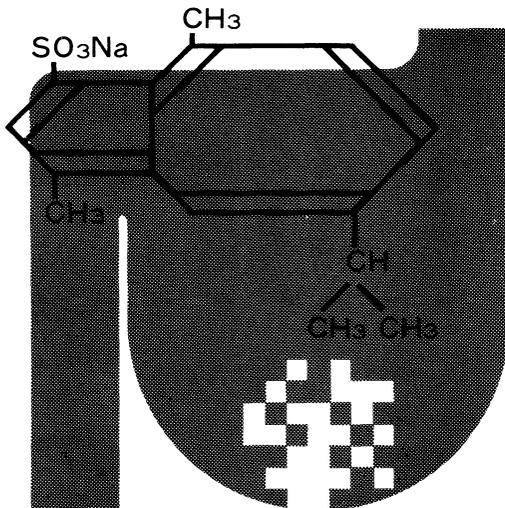
山内 健嗣

編集後記

池田亀夫教授の退職記念号として企画いたしましたが発刊が遅れたことをお詫び申し上げます。多くの方々から先生の現職時代のご活躍ぶりを盛りこんだ暖かい御原稿を頂戴し厚く御礼申し上げます。先生は現在国立療養所箱根病院で静養なさっており、石黒先生の文章を拝見しますと「先生ますますお元気で」とのお気持ちを皆様が見きとお持ちになることと思います。新人紹介にありまますように整形外科教室には毎年十五名前後の新入室者があり、また本年は日本整形外科学会会長を泉田重雄教授がつとめられ教室の益々の発展の素地が築かれようとしています。しかしそのためには同窓会員一人一人の努力が不可欠であることは言うまでもありません。

(幹事長 小川正三)

潰瘍・胃炎の消炎と 組織修復に!



消炎性抗潰瘍剤

アズレン[®]-S顆粒

健保適用

〈成分〉 1g中 水溶性アズレン……3mg
L-グルタミン……990mg

- 粘膜炎症局所に直接作用する。
水溶性アズレンは炎症粘膜に接触して直接に作用し、胃潰瘍、胃炎の炎症抑制効果を発揮する。
- 損傷組織の修復に効果を示す。
L-グルタミンは組織修復促進作用をもち、水溶性アズレンの肉芽新生、上皮形成促進作用と共に、ニッシュの消失を促進する。

- 胃粘膜の抵抗力を高める。
本剤は防禦因子を強化する効果があり、低酸(無酸)性潰瘍にも奏効する。
- 口渇がない。

〈効能・効果〉
胃潰瘍、十二指腸潰瘍、急・慢性胃炎、
原発性・続発性胃炎、随伴性胃炎

〈包装〉 500g, 1kg, 3kg
1.5kg (0.5g × 3 × 1,000枚の分包装)
2kg (0.67g × 3 × 1,000枚の分包装)
3kg (1g × 3 × 1,000枚の分包装)



発売元・**ゼリア新薬工業株式会社**
東京都中央区日本橋小舟町10-11



製造元・**寿製薬株式会社**
長野県坂城町 6351



鎮痛・抗炎症剤
 劇指 **スルガム錠**[®]

薬価基準収載

ペイン・ブロッカー

疼痛・炎症の確かなブロック

新しい非ステロイド系鎮痛・抗炎症剤スルガム錠はプロスタグランチンの合成を抑制し、炎症（疼痛・発熱）を強力にブロックします。その強力な鎮痛・抗炎症作用にもかかわらず、胃粘膜刺激作用は弱い、一歩進んだ薬剤です。

【効能・効果】

下記疾患ならびに症状の鎮痛・消炎
 慢性関節リウマチ、変形性関節症、腰痛症、
 頸肩腕症候群、肩関節周囲炎

下記疾患の鎮痛・解熱

急性上気道炎
 手術後および外傷後の鎮痛・消炎

【用法・用量】

通常、成人1回2錠、1日3回経口投与する
 頓用の場合は、1回2錠経口投与する
 なお、年齢、症状により適宜増減する

※使用上の注意等詳細については、製品添付文書をご参照下さい。

販売



エーサイ

東京都文京区 4-6-10

ROUSSEL

提携

ルセル・メディカ

東京都中央区日本橋区 4-1-1

ROUSSEL

製造

日本ルセル

東京都中央区日本橋区 4-1-1

すぐれた鎮痛・抗炎症・解熱作用を發揮するプロドラッグ



● 効能・効果

〔次の疾患の消炎、鎮痛、解熱〕

慢性関節リウマチその他の膠原病に伴う関節炎、

痛風発作、変形性関節症、腰痛症、頸肩腕症候群、

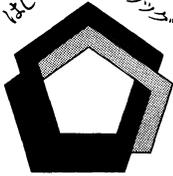
肩関節周囲炎、腱・腱鞘炎、

上気道炎

〔外傷後、手術後および抜歯後の炎症および腫脹の緩解〕

用法・用量、使用上の注意は添付文書をご参照ください。

はじめてのプロドラッグ



非ステロイド系抗炎症・鎮痛・解熱剤

ナパール錠

フェンブフェン製剤 薬価基準収載



製造 日本レダリー株式会社
東京都中央区京橋1丁目10番3号



販売 武田薬品工業株式会社
大阪市東区道修町2丁目27番地



非ステロイド性消炎・鎮痛剤

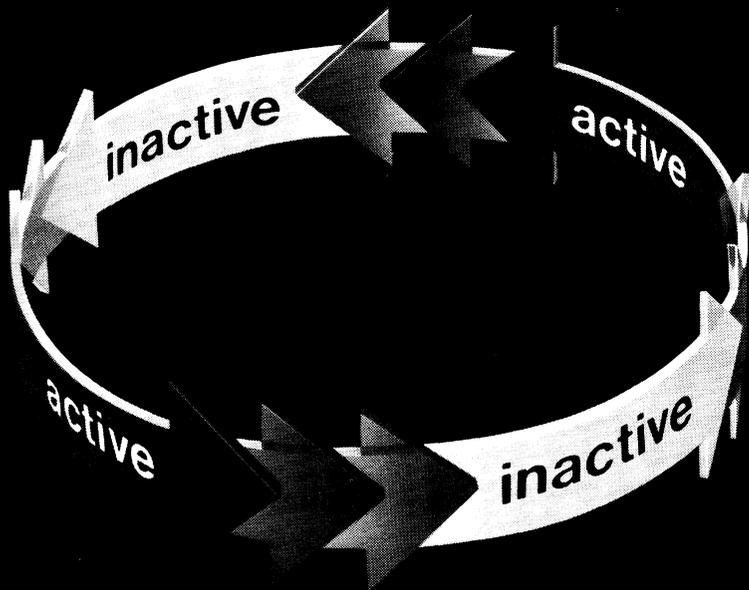
クリリル錠[®]

(スリダク錠)

薬価基準収載

Reversible Metabolism -----Unique Prodrug

- 持続的な抗炎症・鎮痛作用
- 胃腸管への良好な忍容性



〔効能・効果〕

下記疾患ならびに症状の消炎・鎮痛

変形性関節症、慢性関節リウマチ、腰痛症、肩関節周囲炎

※ 用法・用量、副作用等については、添付文書（説明書）を必ずお読みください。



製造
日本メルコ萬有株式会社
東京都中央区日本橋3-9-2 03(271)6241代表



販売
萬有製薬株式会社
東京都中央区日本橋本町2-7-8 03(270)7551代表

S-85COR84-J-4000J

指
要指

ホスミシン[®]

S⁺ 静注用
カプセル
ドライシロップ

小さな体で
大きな力

お知らせ

静注用ホスミシンS
「効能・効果」が追加
されました。
(産婦人科領域)



緑膿菌、変形菌、セラチア、サルモネラ、赤痢菌、ブドウ球菌、大腸菌に…

〔静注用〕

■効能・効果

緑膿菌、変形菌、セラチア及び多剤耐性のブドウ球菌、大腸菌のうちホスホマイシン感性菌による下記感染症

- 敗血症 ●気管支炎、細気管支炎、気管支拡張症の感染時、肺炎、肺化膿症、膿胸 ●腹膜炎、腎盂腎炎、膀胱炎 ●子宮付属器炎、子宮内感染、骨盤死腔炎、子宮旁結合織炎、バルトリン腺炎

バルトリン腺炎

:追加承認分

〔カプセル・ドライシロップ〕

■効能・効果

緑膿菌、変形菌、セラチア、サルモネラ、赤痢菌及び多剤耐性のブドウ球菌、大腸菌のうちホスホマイシン感性菌による下記感染症

- 癰、癰症 ●腸炎、細菌性赤痢 ●膀胱炎、腎盂腎炎 ●眼瞼炎、麦粒腫、臉板腺炎、涙囊炎 ●中耳炎、副鼻腔炎

健保適用

用法・用量、使用上の注意等は製品添付文書をご参照ください。



明治製薬株式会社
104 東京都中央区京橋2-4-16
TEL: (03)272-6511 (大代表)

強力な鎮痛・抗炎症・解熱

炎症部位のプロスタグランジン生合成を強力に抑制



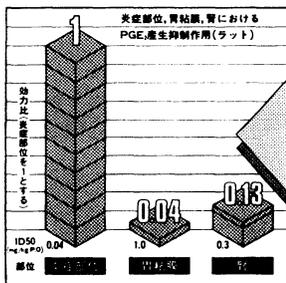
〈効能・効果〉 ●慢性関節リウマチ、変形性関節症、腰痛症、頸肩腕症候群、歯根膜炎の消炎・鎮痛 ●急性上気道炎の鎮痛・解熱
 ●外傷後、小手術後ならびに抜歯後の消炎・鎮痛
 〈用法・用量〉 ブラノプロフェンとして通常成人1回75mgを1日3回食後に経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。頓用の場合には、1回75mgを経口投与する。
 (使用上の注意、等については添付文書をご参照下さい。)

〈健保適用〉

- 炎症・疼痛性疾患の疼痛・炎症に
 - 急性上気道炎の発熱・疼痛に
- 鎮痛・抗炎症・解熱剤

ニフラン[®]カプセル

ブラノプロフェン ㉟㉟



(吉富製薬研究所)

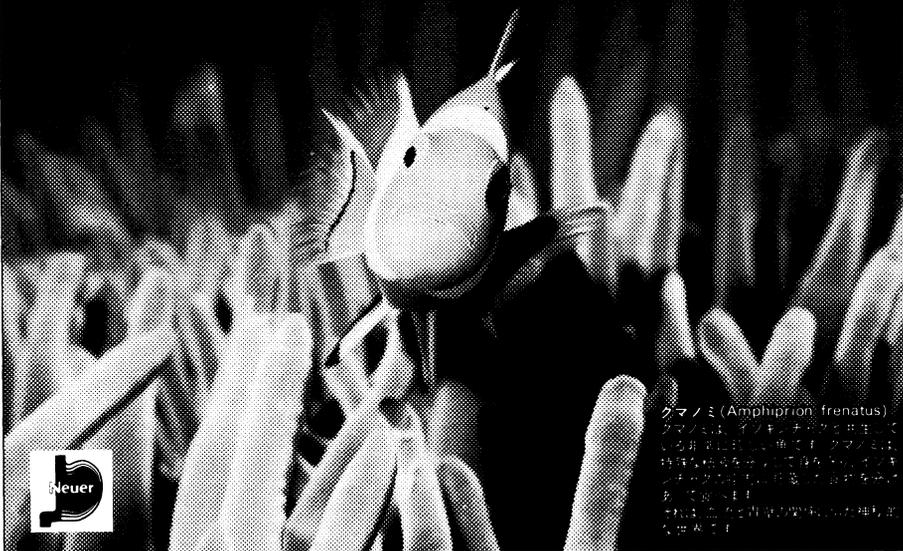
プロスタグランジン生合成抑制は
 胃腸で働く、炎症部位で
 選択的に強力



吉富製薬株式会社

〒541 大阪市東区平野町3丁目35番地

血流は胃壁をまもる…



クマノミ (Amphiprion frenatus)
クマノミは、イソギンチャクと共生して
いる非常に珍しい魚です。クマノミは、
特殊な粘着物質によってイソギンチャク
に付着し、一生をそこで暮らす魚です。
それは、心と胃が密着している神秘的
な世界です。

胃炎・胃潰瘍の治療に

粘膜防御性 胃炎・胃潰瘍治療剤

健保適用

【効能・効果】

下記疾患の胃粘膜病変(びらん、出血、発赤、
浮腫)の改善
急性胃炎、慢性胃炎の急性増悪期
胃潰瘍

ノイエル[®]

Neuer[®] 一般名: Cetraxate

★用法・用量、使用上の注意は製品添付文書をご参照ください。



第一製薬株式会社 東京都中央区日本橋三丁目14番10号

Froben

強力かつ速やかな鎮痛・抗炎症
炎症組織のPG生合成を強力に阻害する



鎮痛・抗炎症剤

① フロベ[®] ② フロベ[®] 果粒米[®]

[1錠中:フルルビプロフェン40mg含有]

[0.5g中:フルルビプロフェン40mg含有]

- 1.優れた鎮痛・抗炎症作用
- 2.速やかな効果発現
- 3.炎症組織へ集中的に移行
- 4.強力なPG生合成阻害作用

- 効能・効果
- 下記疾患並びに症状の鎮痛・消炎
慢性関節リウマチ、変形性関節症、腰痛症、齒髓炎、齒根膜炎
- 抜歯並びに歯科領域における小手術後の鎮痛・消炎
- 薬価基準収載
- 提携：ブーツ社 イギリス
- 使用上の注意等は添付文書をごらんください



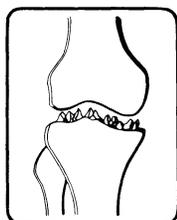
科研製薬株式会社
東京都文京区本駒込2丁目28-8

新しい関節症治療剤

変形性膝関節症の治療は、この時期から



ここまでくれば、遅すぎます。



手遅れになる前に

関節軟骨保護剤

アルテパロン®

〔組成〕

1 アンブル (1 ml) 中
ムコ多糖体多硫酸エステル……………50mg

〔効能・効果〕

変形性膝関節症

〔取扱い上の注意〕

規制区分：本剤は指定医薬品である。

貯 法：室温保存

〔包装〕

1 ml × 5 アンブル

〔用法・用量〕

通常、成人 1 回 1 アンブルを 1 週間ごとに膝関節腔内に投与する。なお、症状の改善が認められない場合は 10 回を限度として投与を中止する。

本剤は膝関節腔内に投与を行うので、投与にあたっては厳重な無菌的操作のもとに行うこと。

本剤の使用に際しては、使用上の注意等添付文書をよくご覧ください。

輸入 丸 丸 株式会社
販売 大阪市大淀区中津 1 丁目 6-24
Tel. 06(371)8876(代)

製造 ルイトポルド・ウエルク製薬会社
ドイツ・ミュンヘン

CIBA-GEIGY



セフェム系抗生物質製剤

ハロスポア[®]

日抗基 注射用塩酸セフォチアム

〔指 要指〕

静注用0.25g・0.5g・1g
筋注用0.25g

使いやすいバランスのとれた
抗菌スペクトラム。

優れた組織移行性。

■効能・効果 セフォチアムに感性的ブドウ球菌属、連鎖球菌属（腸球菌を除く）、肺炎球菌、インフルエンザ菌、大腸菌、クレブシエラ属、エンテロバクター属、シントロバクター属、プロテウス・ミラビリス、プロテウス・ブルガリス、プロテウス・レットゲリー、プロテウス・モルガニーによる下記感染症

○敗血症 ○術後創・火傷後感染、皮下膿瘍、よう、疔、疔腫症
○骨髄炎、化膿性関節炎 ○扁桃炎（扁桃周囲炎、扁桃周囲膿瘍）、気管支炎、気管支拡張症の感染時、肺炎 ○肺化膿症、膿胸 ○胆管炎、胆のう炎 ○胆膜炎 ○腎盂腎炎、膀胱炎、尿道炎、前立腺炎 ○髄膜炎 ○子宮内感染、骨盤死腔炎、子宮旁結合織炎、子宮付属器炎、バルトリン腺炎 ○中耳炎、副鼻腔炎

*詳細につきましては、製品の添付文書をご覧ください。

日本チバガイギー株式会社

兵庫県宝塚市美幸町10番66号

医師と患者と、…そして「フェルデン」

フェルデンは先生方に高く評価され、患者さんにも好まれています。



● 強力な鎮痛効果と速効性

● シンプルな1日1回1カプセル投与

〔効能・効果〕

1. 右記疾患並びに症状の鎮痛、消炎：慢性関節リウマチ、変形性関節症、腰痛症、肩関節周囲炎、頸肩腕症候群
2. 外傷後、手術後及び抜歯後の鎮痛、消炎
3. 右記疾患の解熱、鎮痛：急性上気道炎

〔用法・用量〕

1. 効能・効果1及び2の場合：通常、成人にはピロキシカム20mgを1日1回食後に経口投与する。頓用の場合には20mgを経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減するが、1日最高量は30mgとする。
2. 効能・効果3の場合：通常、成人にはピロキシカム10～20mgを1日1回食後に経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減するが、1日最高量は30mgとする。

鎮痛・抗炎症剤 — (オキシカム系)

® **フェルデン**®

Feldene® ピロキシカム

● 使用上の注意は製品添付文書をご参照ください。



科学を世界の向上のために

日本ファイザー株式会社
東京都新宿区西新宿2-1-1 TEL(344)4411 室160

Elcitonin[®] Inj. 10 U.

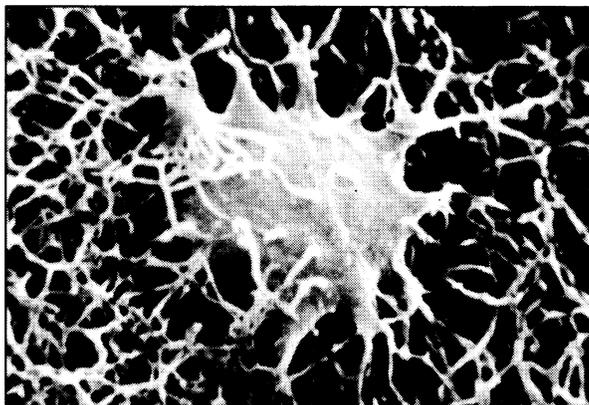
骨粗鬆症における 疼痛の改善に!!

合成カルシトニン誘導体製剤

劇

エルシトニン[®]注10単位

(一般名：エルカトニン)



骨細胞(走査電顕像)



緻密骨(偏光顕微鏡像)

■ 効能・効果

骨粗鬆症における疼痛

■ 用法・用量

エルカトニンとして、通常成人には1回量10エルカトニン単位を週2回筋肉内注射する。なお、症状により適宜増減する。

健保適用

■ 使用上の注意は、添付文書を御参照下さい。

 東洋醸造株式会社

末梢性神経障害に

メチコバル®

錠500 μ g・錠250 μ g/注射液500 μ g



メチコバルは末梢性神経障害治療剤としてエーザイが独自の技術で合成・開発したメコバラミン製剤である。本剤は厳密な二重盲検同時比較対照法によって、末梢神経障害(糖尿病性神経炎、多発性神経炎など)に対して有効性が証明され、症状別には運動障害(歩行・起立・反射障害)、知覚障害(しびれ・異常感など)に有意の改善が認められている。

●効能・効果

末梢性神経障害

ビタミンB₁₂欠乏による巨赤芽球性貧血
(注射液のみ)

●剤型

メチコバル錠 500 μ g

メチコバル錠 250 μ g

メチコバル注射液500 μ g

※ご使用にあたっては添付文書をご参照下さい。



保衛収載



エーザイ
東京都文京区小石川4

A-L 8693



炎症性疼痛に

■作用特性

- 鎮痛作用、抗炎症作用ともに強い
- 消化管潰瘍形成作用が弱い
- 経口投与で吸収速やか
- 炎症部位への移行性が高い

■効能・効果

下記疾患ならびに症状の鎮痛・消炎
 変形性関節症、頸肩腕症候群、腰背痛症
 下記疾患の鎮痛・解熱
 上気道炎

外傷ならびに手術後の鎮痛・消炎

■薬価基準収載

※用法・用量、使用上の注意、取扱い上の注意等は添付文書をご参照ください。

鎮痛・抗炎症・解熱剤
トレクチン[®]



TOLECTIN[®]

- (指)トレクチン錠100mg
- (指)トレクチン錠200mg

(トルメチンナトリウム錠)



大日本製薬

大阪市東区道修町3-25
 提携 マクニール社(米国)

新世代を大きくひらく

オキサセフェム系抗生物質製剤

（特）
（薬）

シオマリン[®]

静注用・筋注用

日抗基 注射用ラタモキシセフナトリウム 略号LMOX



シオマリンは、塩野義製薬研究所で合成されたオキサセフェム系の抗生物質ラタモキシセフナトリウムの注射用製剤で、従来のセフェム系抗生物質（セファロスポリン系又はセファマイシン系）とは化学構造が異なる新しい世代の抗生物質です。

■効能・効果

大腸菌、クレブシエラ属、シトロバクター属、エンテロバクター属、セラチア属、プロテウス属、インフルエンサ菌、バクテロイテス属のうち本剤感性菌による下記感染症

- 敗血症 ●髄膜炎 ●肺炎、気管支炎、気管支拡張症の感染時、慢性呼吸器疾患の二次感染 ●肺化膿症、膿胸 ●胆管炎、胆嚢炎 ●肝膿瘍 ●腹膜炎
- 腎盂腎炎、膀胱炎 ●子宮内感染、子宮付属器炎、子宮旁結合織炎、骨盤死腔炎

■添付文書の「使用上の注意」をご参照下さい。



シオノギ製薬

大阪市東区道修町3-12

■健保適用

59-4A51